
ガンパレードマーチ ~福岡県守備部隊7821中隊~

御劔剣次

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ガンパレードマーチ 〈福岡県守備部隊7821中隊〉

【Nコード】

N7191A

【作者名】

御劔剣次

【あらすじ】

この小説の執筆を完全凍結します。すみませんでした。

NO・0 プロローグ(前書き)

勝手にガンパレの世界を自分流に書く事をお許しください。

NO・0 プロローグ

1945年、第二次世界大戦は意外な形で終幕を迎えた。
『黒い月』の出現。

それに続く、人類の天敵の出現である。

人類の天敵、これを幻獣という。

確固たる目的も理由もなく、ただ人を狩る、人類の天敵。
人類は、存続のために天敵と戦うことを余儀なくされた。

それから50年。戦いはまだ続いている。

「敵の数が多すぎる！」

「ダメだ！ 潰しても潰しても湧き出てきやがる！」

「伝令！ ほ、本部が……陥落した模様……」

「なに！ 本部が！？ ……くっ」

「覚悟を決めたほうがよさそうだな」

「隊長！ 愛してるぜい！ どこまでもついていきませえ！」

「俺たちも同じだあ！ 隊長！」

「おまえたち……。わかった。ならば奴らに一泡吹かせてやれ！」

「そうこなくっちゃ！ やるぜえ！」

「俺たちの力、見せてやるぜ！」

そのロシア語の通信を最後に、人類はユーラシア大陸より姿を消した。

幻獣は間もなくして日本に上陸した。

彼らにとっては、いままでと何らかわらない侵攻だったのだろうが、そうはいかなかった。

日本の軍はこれを撃退。幻獣の一度目の日本上陸は失敗に終わったのだった。

しかし、日本軍はその機能をほとんど失った。事の重大さに気付いた日本の首脳は、二つの法案を提案した。その内容は、熊本要塞の戦力増強と、学徒強制動員である。

人は、追い詰められれば同じ事を考えるのだろうか。

こうして、学生ばかりを集めて部隊は次々と作られていった。こんかいの主役となる7821中隊もその一つである。

OVERS systemは現在データ取得中……読取り完了しました。ようこそ第七世界の方。このデータは干渉不可とされています。セプテントリオンによりロックが掛けられています。そのため観賞のみ可能です。

NO・i 現れたる風（前書き）

この話は福岡を自分流に書き替えるものです。福岡県民の皆さん、すみません。

NO・1 現れたる風

朝、なんていいものだろう。小鳥がさえずり、朝日が眩しい。本当に最高だ。その視界にほったてハンガー（整備テント）が無ければもっといいんだけど。

まったく、いい迷惑だ。どころじゃないな。何で俺たちみたいな子供が戦争しなきゃいけないんだ？ 世の中絶対に間違ってる。

ああ、そうそう、オレの名前は暁 太一（あかつき たいち）。

これでもOVERSのことは知っている。っていうか第七世界の介入者だし、オレ。

とある事情で（プロローグ最後尾参照）ここから出らなくなっ
たし、あんたたちもこっちにこれないわけ。

まあ、ここがオトリになったおかげで別の入り口は守られたわけ
だけだね。まあ、閉じ込められたけど一応本望かな？ 可愛い娘も
いっぱいいるし。

だけど死ぬ可能性があるのはいただけないな。

それにオレは介入してるつつつても、体は自由に動かせないんだ
よな。オレはいわゆる意識だけの存在で、体を動かしてるのはこっ
ちの世界の暁 太一なわけ。ま、簡単にいえば、あんたたちとは中
にいるか外にいるかの違いしかないってわけ。

あ、そうそう、『』がでてきたらオレだと思って。

それじゃ、こっちの太一がどういうふうに物語を作っていくのか、
見届けようじゃないか。

「はあ。いよいよ僕も部隊入りか」

朝の日差しを浴びてその姿が一段と大きく見えるテント。それを
見上げてため息をつく少年がいた。彼が暁 太一である。年齢は1
6歳。

「まあそう落ち込むなって、暁戦士。何も悪いことばかりじゃないって」

突然後ろから声をかけられ、すこし驚く太一。振り返ると、意地悪く笑う青年が立っていた。

「あの、失礼ですがどなたですか？」

「オレは八神 遼平（やがみ りょうへい）十翼長。おまえと同じで、この学校に兵隊として通うことになった。よろしくな」

遼平は、太一の背中を強くたたいた。咳き込む太一。

「それに、おまえ一人がそうだったわけじゃないから、ネガティブになるな」

「え、うん」

太一が軽く頷くと、遼平は片眉を器用に上げた。

「返事は、はい！ だろう。オレのほうが階級上なんだから」

「あ、う……はい」

何だか変な感じをうける太一だった。それもそのはず。ついこの間までは一般市民だったのに、急に軍に放り込まれたのだから。

故に、軍人のあいさつなど、今までの人生で一度だってしたことがない。ましてや、そのあいさつの相手が、自分と同年代の少年である。違和感を感じるのは当然だ。

「それより、早く入らないと遅刻だぞ」

遼平は時計を親指でさす。短い針は七時を、長い針は三十分を指していた。HRが始まるのは四十五分である。

「うわ！ 大変だ！」

急いで駆け出す太一を、遼平は呼び止めた。太一は何事かと振り返る。

「教室行ったら先生に伝えといてくれ。遼平は今日は欠席するってな」

欠席？ 元気そうなのに？ 太一は小首を傾げた。

『どの学校にもよくいるよね。ずる休みするやつ』

鐘が鳴る。走った甲斐あってか、太一はなんとか席につくことができた。引き戸特有の音を鳴らし、ドアを開け先生が入ってくる。「おはよう諸君。入学式がなくて悪かったな。だが察してほしい、余裕がないのだ」

ずいぶん若い先生だ、22歳ぐらいだろうか。

「オレの名前は江口 弘（えぐち ひろし）。この一組の担任だ。それとおまえたちには国語と物理、科学、数学を教える。だが、国語と物理以外はあまり得意じゃない。みんなと一緒に学ぶ形になるだろう」

言い終わった後に、ニコツと笑顔を振りまく弘。教卓に置いた黒い表紙の手帳を手に取り、開く。表紙には【出席名簿】と書かれていた。

『頼りねえ先生だな……ておい！ 寝るな太一！ つて、オレも太一だった……複雑。じゃなくて、起きろ！』

「それじゃあ、出席をとるぞ。暁。……暁？」

呼ばれた本人は机に突っ伏し、穏やかに寝息を立てている。静かな笑いが狭い教室に響く。

「しかたない奴だな。おい、暁！」

「！！ は、はい！」

「確かにオレの話は長かったかもしれないが、寝るのはよくないな」
「す、すみません……」

クラスのクスクスが、大きな笑いに変わった。顔を赤くする太一。「よし、もうこれで暁の名前は覚えたぞ。次は……」

次々と名前をあてられ、返事をしていく生徒達。一人下をむく太一。それを見ては笑い会う生徒数名。

「ええと、八神。……八神はどうした？」

その名前を聞き、太一は先程遼平に言われたことを思い出した。
「せ、先生」

「なんだ？ ええと……名前は、と」

おもむろに名簿を確認する弘。

ええ！？ と太一は心の中で突っ込んだ。

「……暁です」

「ああ、そうそう。暁、どうした？」

まったく調子のいい人だ。心の中だけに押し止めた言葉。

「八神十翼長は今日は欠席するそうです」

「欠席？ 初日にか？ しょうのないやつだな。まあいいか。出欠はとりおわったな。じゃあ授業道具を配るか」

そういうと弘は、後ろに置いていた大荷物を小分けにし、それぞれ生徒達に配った。

6時間目終了のチャイムがなり、HR。騒ついていた生徒達は、弘のわざとらしい咳払いで静まる。

「今日がはじめてだったな、みんな。これから放課後の時間の使い方の説明する、よく聞いておけ」

みんなが不思議そうに先生の顔を見る。それもそのはず。時間の使い方の説明など、今まで一度もされなかったのだから。

時間は物でもあるまいし。誰かが思ったに違いない。

「放課後は、HRが終わってから夜の八時までだ。原則として軍務の時間になっている。つまり、自分のウォードレス（戦闘服）を整備したり、武器の整備をしたりと、まあ、整備の時間だな。さぼってもいいぞ、自由参加だからな。ただ、それで人が一人戦場で死ぬかもしれないがな」

みんなが凍った。これはつまり、自分に他人の命がかかっているということだからだ。

「それじゃ解散。つとそうだ、忘れてた。整備、戦闘員以外は自分の割り当てられた仕事をこなせるよう、自分の能力を高めておくように。自己判断でな」

起立、令。お馴染みの掛け声が掛けられ、生徒達はそれぞれの行

く先に向かった。

ほったてのハンガー内は淋しいものだった。ウオードレスをしま
うロッカーと整備道具箱のほかには、何も無い。奥の方には何か大
きなものを置くスペースがあるが、何が置かれているわけではない。
「コーラ、飲む？」

突然後ろから声をかけられる。今日は2度目だ。太一も多少は心
得があるらしく、驚きはしなかった。

「いいの？」

振り返り、コーラを視界に収めて太一は聞いた。

「うん。間違つて2本買ったの」

声をかけてきた少女はコーラを太一に手渡した。

「ありがとう」

受け取る際に、少女の顔を見た。

「おやおや？ これまた随分とかわいい娘じゃないか。確か名前は
井巻 理利（いまき りり）だったな。オレはかわいい娘に対して
はぬかりがないのだ」

理利は太一の隣に立ち、作業台を見下ろした。

「ずいぶんと念入りに仕事するのね」

理利が興味深そうに覗き込んでくる。太一は少し嬉しくなり、口
元が緩んだ。

「うん、死にたくないから」

太一が整備しているウオードレスは万全の状態だが、さらに細か
い部分まで調整していた。隣には、それなりに精通していないと、
何を説明しているのかわからないようなマニュアルが置いてある。

「でも、戦闘適性値はたかいんでしょ？」

「あんなのただの数字だよ。本当に強い人は、生きたいと強く願っ
て、その努力を欠かさない人だよ」

不思議そうな顔をして質問する理利に、太一はウオードレスをい

じりながら答えた。理利は微笑んだあと口を開く。

「じゃあ、絢爛舞踏も生きたいって強く思ってるんだね」

「絢爛舞踏？ なにそれ？」

太一は思わず作業の手を止めた。なんとも不思議で、安心できる響きに。

「知らないの？ 絢爛舞踏」

首を縦に振る太一。

「踊るように舞うように、敵と味方に死を呼ぶ最も新しい伝説。学生たちの間で有名な、いわゆる都市伝説みたいなものね」

「へえ、知らなかった」

理利は意地悪くフツツと笑った。

「手、止まってるけどいいの？」

「あ、そうだ」

顔を赤くし、作業に戻る太一。実は、もうほとんどすることがないのだが、意地悪く言われ、反射神経で手を付けてしまったのだ。た。

「手伝ってあげようか？」

理利がそう言つと太一は首を振った。

「ううん、いいよ。もう遅いし、帰ろうかな」

時計を見る。10時を回っていた。気が付くと、ちらほらといった生徒達はいなくなっていた。

「そう。じゃ、一緒にいこうか。学生寮でしょ？」

「うん」

そう返事をし、立ち上がる。ワードレスをロッカーにしまい、ハンガーの照明用電源を落として帰路に着いた。

ふと、太一は振り返った。月明かりの照らすハンガーは、まるで総てを守る象徴であるかのように淡く佇んでいた。

NO.2 風の駆る「あしきゆめを狩る巨人」

太一は通学路と呼ばれる、国道から二本離れた道を歩いていた。時折吹く風が、もうすぐ春だと言っているようだ。

そんな空気に目を瞑っていると、後ろから走ってくる足音が聞こえてきた。ふと振り返ると、昨日話し合った子だった。

「おはよう、暁くん！」

「おはよう、ええと……」

とりあえずの返事を返したが、肝心の名前が出てこない。その異変に理利は気付いた。

「あれれ？ もしかして、私の名前知らない？」

その通りだった。首を縦に振る。

朝の出欠を取っている時は恥ずかしさあまりに聞いておらず、きのう帰る途中、あれほど話しをしたのに名前を聞きはしなかった。「そういえば自己紹介してなかったね。あたし井巻 理利、階級は戦士。よろしくね」

ニコツと明るく笑いかける理利。太一もつられて微笑む。

「うん。あ、ぼくは……」

「暁 太一くんでしょ？ あの居眠りの」

理利は笑顔で言う。太一は一瞬でぶすっと不機嫌顔になると、理利から目をそらし、早歩きしだした。

あ、気にしてるんだとクスツとし、理利は急いで後を追った。

「ごめんごめん、謝るからまって！」

「どうせ僕は居眠り男さ。先に行ってるよ」

そう言いつつ、さらに足を速める。理利もそれに合わせて速くなる。

「まってってば！」

そうこうしてるうちに、いつのまにか走っていた。二人並んで笑顔で。学校の前（元小学校だった廃校舎）につくころには、もう

立っていられないほどだった。

「はあ、はあ、こんなに走ったの久しぶりだなー」

理利が、校門にもたれながらいった。汗が頬を伝い、顎から落ちる。

「僕は初めてかも」

地面に大の字になりながら太一は言った。ゼイゼイと喉をならしていた二人だが、やがて笑いはじめた。

「なにがそんなに楽しいんだ？ 二人とも」

「せ、先生！？」

学校側から来た弘に驚き、太一と理利が同時に声を上げた。

「二人とも、仲良く走って登校か？ そんなに学校が好きなのか」

「違います！」

また息が合う二人。

「まあ、何にしても仲がいいのはいいことだ」

二人が顔を見合わせたあと、赤く染めてそらした。笑う先生。

「そうだ、ちょうどいい。二人に手伝ってほしいことがあるんだ、着いてきてくれないか？」

二人は、何だろう、という顔をして先生に続いて校内に入っていた。

先生につれられてきたのは、ハンガー前だった。ハンガーの前に運送用の軍用トラックが停められていた。

「先生、あのトラックは何ですか？」

理利が先に尋ねた。

「あれは、この部隊に配置されることになった新兵器だ」

「新兵器？」

また息が合う二人。

「ああ、そうだ。それでこいつは、ここで試運転をすることになる」
試運転？ とするとこいつは乗り物か？ 士魂しの改良型だろう

か？ 太一は色々と思いを巡らせる。

「気になるようだったら見せてやるうか？」

先生が悪戯に笑いかける。

「お願いします」

またまた息が合う二人。さすがに恥ずかしくなつて、距離を置く。

「シートをはずしてくれ」

運送トラックのまわりで作業している人に声をかけた。

「いいんですか？ 勝手にそんなことして」

作業員がリストから目を離し、弘のほうに向き直る。

「いいからいいから」

そうして、トラックにかけられていたシートが外された。白いシ

ートの下から、巨大な人形のようなものが姿を現した。

「せ、先生、なんですか、あれ……」

先に口を開いたのは理利だった。太一はまだ啞然としている。

「自分達で見てくるといい」

先生はそう言った。太一たちは恐る恐るそれに近づく。

「The Spirits of Samurai……」

理利は、トラックの上に置いてある紙に書かれた字をスラスラと読んでみせた。太一にはそんな芸当はできない。かわりに、その下に書いてある日本語を見た。

「こっちはなんて書いてあるんだろう。えっと、和名、土魂号」

そこに書かれた文字にしばらく理解が遅れた。思考が追いついてくると、次第に驚きが変わっていった。

「ええ！」

いい加減飽きる気もするが、また息が合う二人。

「せ、先生！ これ、あの土魂号ですか！」

後ろにきた弘に理利が聞く。

「そうだが」

「でも、車輪も砲身もない……」

太一は土魂号をまじまじと見ている。

「それはそうだ。必要ないからな、この人型戦車にはな」

「人型戦車？」

理利がいかにも不思議そうに聞く。太一も言いそうになったのだが、揃うといやなので抑えた。

「ああ、人型戦車。噂によれば芝村が作らせたらしいが、詳しいことは知らん。その構造は……」

「人工筋肉ですか？」

弘と理利が驚いて太一を見た。

「これだけのものを動かすには、鉄のように硬い物質では無理ですから、そのへんが妥当かなと思って」

「正解だ暁。すごい推察力だな」

弘は拍手をしながら素直な感想を口にした。太一は照れて、顔を下に向けた。

「いえ、そんなことは」

『なかなかやるな、こいつ。……え？　だ、誰だ！　……なに、おまえが？　……なるほど、そういう事か。残念だが、ここには絢爛舞踏はいない。……諦めろ、それが運命ってやつだろ、おまえの』

「それより、この機体は誰が使うんですか？」

太一は尋ねつつ、弘の顔を見つめる。弘はうれしさに顔を輝かせていた。

「もちろん、これから選ぶつもりだ。それで、手伝ってほしいのはあいつを体育館に運び込むことだ」

弘が指を差す。その方には、土魂号の胸部の形をしたものがぽつんと置いてある。

「なんですか、あれ？　胸だけ置いてありますけど」

太一が弘に聞く。

「すぐにわかるさ。じゃ、運ぶか」

弘を先頭に、三人は胸部の元へと向かった。せーの、と弘が掛け声を掛け、力を合わせて胸部を押す。土魂号の胸部は重かった。車輪がついていたが、なかなかスムーズにはいかない。

体育館のなかに運び込んだときには、一時間目の授業が終わっていた。

「よし、みんな揃ってるな」

先生が体育館を見回す。ウオードレスを着込んだ生徒達から話し声が聞こえてくる、大声で。まあ無理もない。あんなものを見せられたのだから。

「静かにしろよ。これからあれに乗るパイロットを選ぶわけだが、うるさくしてるやつは乗せないぞー！」

みんな一斉に黙り込む。乗ってみたい。誰もがそう思っているからだ。

「それじゃあ、適格者を選ぶか。出席順に行くぞ、整備班も乗っておけ」

出席順？　じゃあ僕が最初！？　太一は声に出さずに驚いた。

「まずは暁からだな」

「はい」

まわりから羨みの声が聞こえる。太一は理利の方をチラツと見た。がんばれ、と口の形で言っている。太一は深呼吸すると、土魂号のシミュレーターに乗り込んだ。

コクピット内は、太一が想像していたものより狭かった。太一は座席に座ると、シミュレーターを起動した。操作の仕方は弘のリング（多目的結晶）の接続で熟知している。モニターがつく。モニターには、見慣れた福岡の町並みが映し出されていた。

「あれ？　見たことあるような……どこだっけ？」

頭部を回転させ少し見回すと、学生寮が見える。その先には学校も。

「ここって、小郡？　この視点で見るとこうなんだ」

色々と感じしていると、何かが接続された。

「こら、余計なことしないで目標確認しろ」

接続されたのは無線だったようで、無線から弘の声が入ってくる。

「はい、すみません」

人型戦車【士魂号】は、うねりをあげ、仮想の町の中で歩きだした。

END

NO.3 そよ風、素質は嵐

「えーと、目標は……ゴ布林リーダー一匹の撃破か、簡単そうだな」

町の中を進みながら左のモニターを見る。ターゲットの位置が表示されている。

「すごいな、敵がどこにいるのか手に取るようにわかる」

太一はコクピット内を少し見回した。練度の低い学兵を基準に設計されているためか、構造はさほど複雑ではなかった。

「つと、ターゲット移動開始確認。回り込みます」

実戦に基づく戦闘訓練だと弘から説明があった。弘が仮の指揮官、という設定になっている。

「いい判断だ」

弘が褒める。すこし照れる太一。

「ターゲットに接近中。もう少しで視界に入ります」

交差点を曲がると、ゴ布林が五匹ほど見えた。その中にリーダーの姿を見つける。

「あれだな、よし」

銃を構える。引き金を引く。重い炸裂音と共に弾をばらまくマシンガン。太一は、それになぜか違和感を覚えた。

ゴ布林たちが次々と幻へ還っていく。しかし、リーダーは物陰に隠れ、うまいこと弾を避けている。

「なかなかやるな、あいつ。さすがリーダー、か」

太一は慎重に近づいていく。角まであと数メートルのところまでゴ布林リーダーが飛び出し、その手にもったトマホークを投げ付ける。回避などできない。飛来するトマホークを左腕で受ける。

「くっ！ っ、このー！」

再び隠れようとするゴ布林リーダーに狙いを定め、引き金を引く。こんどは直撃し、幻に還っていくリーダー。

「やった！」

「油断するな、敵の増援だ」

無線の先生の声を聞いた直後だった。前方から生体ミサイルが飛んできた。太一はとっさに身をひねる。

「うわあ!？」

なんとか直撃は免れたが、左腕をもつていかれた。

「な、なんだ!？」

太一は、ミサイルが飛んできた方を見る。遠くに四つんばいの幻獣がいた。

「なんだ、あれ!？」

とっさに銃をかまえ、左のモニターを見た。すると、幻獣を表す赤い点は、マシンガンの射程圏外だった。

「射程圏外!？」

再び前方を見ると、その幻獣は攻撃態勢になっていた。太一は急いでビルの影に隠れる。すぐ後に爆発音が響き、建物が崩れ落ちる音が聞こえた。太一は焦りをおさえようと深呼吸をし、そして、自分の置かれている状況考えた。

モニターに少し目をやる。幻獣がこちらに向かって移動を開始した。幻獣の名前が表示されているのに気がついた。

「ゴル、ゴーン?」

太一は、変な名前だと内心思った。そう思えたのは、敵から身を潜めているという安心感からだろう。他に敵はいないかを確認するが、モニターにはゴルゴーン以外は映っていなかった。冷静に考える、考える。

「よしっ」

太一はビルの影から飛び出し、こちらに向かってきているゴルゴーンに銃を撃った。先程のゴブリンリーダーの戦法を真似たのだ。しかし、ゴルゴーンは弾にいくら当たっても平然としていて、すぐに攻撃態勢になった。再び物陰に隠れる。爆発、倒壊音。

「だ、ダメだ、びくともしない」

太一 は焦った。幻獣がこんなに強いものだとは思ってもいなかった。シミュレーションとはいえ、死の恐怖すら感じる。戦闘になれば、本物の幻獣を相手にしなければいけない、と考えたからだ。

「どうする、どうすれば勝てる？」

再び太一は考えた。そして、一つ思いついた。

「これがウォードレスに似た構造ならいけるかも！」

得意の兵器知識。ウォードレスと生身の決定的な違い。

太一は呼吸を整え、左のモニターに意識を集中した。敵がじわじわと迫ってくる。残り十二メートル、十一メートル……十……九。

「あと少し」

八……七……六。

「あと2メートル。」

五……四メートル。

「うわあああ！」

太一はビルの影から飛び出すと、ほとんど目の前にいるゴルゴーンに渾身の蹴りをお見舞いした。

ウォードレスと生身の決定的な違い。それは、筋力。

バリバリツという音とともにビルにめりこんでいくゴルゴーン。

「消える、消えてくれー！！」

祈るように、壁にのめり込んだゴルゴーンに向かって叫ぶ。しかし、ゴルゴーンは力なく立ち上がる。太一は絶句した。

もうだめだ、土魂号は出血のしすぎでもう動けない。渾身の一撃も無駄におわった？ そう思った。だが、ゴルゴーンの様子が変わった。足元が崩れ、幻へと還っていく。

「やった……」

太一が小さくつぶやいた。モニターに作戦終了の文字が出て、ハッチが開いた。覗き込む弘。

「大丈夫か、暁？」

弘は太一を引っ張りだした。太一は力なくなすがまま。

「はい、なんとか。」

太一は消え入りそうな声で答えた。

「やったな、暁。初戦でゴルゴーンに勝てるやつなんて、そうそういないぞ」

弘の誉め言葉に、太一は力なく笑った。首に力が入らず、重力のかかる方向に頭が垂れ下がる。

「大丈夫!? 暁くん!」

理利が駆け寄ってくる。意識がだんだん遠くなっていく。眠い…
…。太一の思考は停止した。

気が付くと、保健室のベッドの上だった。あのあと、運び込まれたらしい。頭がふわふわとし、いまいちはずきりしない。

「お、目が覚めたかい?」

久しぶりに聞くかのように懐かしい声だった。声のしたほうを向くと、微笑む少年が一人。

「八神……十翼長?」

「へえ、覚えててくれたのか。ほんの少ししか話してなかったのに、遼平はうれしそうに言った。

「まあ、オレはいま百翼長なんだけどな」

「え?」

「初日から休んだだろ。あんとき昇格したり、部隊を指揮するための手続きしたりして色々と大変だったんだ。ずる休みしてたわけじゃないぞ。人聞きの悪い」

「え? なんのことですか?」

太一は一人、不思議そうな顔をした。

『げ! こいつ、オレの声が聞こえんのかよ。まいったね』

もう一人の太一の声を聞いた遼平は、軽く笑った。

「そういえば、部隊を指揮するための手続きをしたんですね」
悩んでいた太一が突然聞いた。

「ああ、そうだけど?」

太一の顔を見て答える遼平。太一も真面目な顔で見返す。

「もしかしてこの部隊の指揮をとるんですか？」

「なんだ？ オレじゃ不満か？」

遼平は太一を睨んだ。太一はすこしたじろいだ

「いえ、そういうわけではありませんが……」

「オレみたいなのが指揮をとれるか心配だって顔してるぞ、なめんなよ」

「す、すみません」

太一の目が泳いだ。遼平は威張るかのように腰に手を当てる。

「ごう見えても、俺は頭はいいんだ」

「そうなんですか。とりあえず、よろしくお願いします。八神委員長。」

「委員長？」

初めて聞くかのような遼平の反応。太一は補足する。

「先生が、指揮官のことはそう呼べって」

「ああ、そういうこと、わかった。よろしく、暁戦士」

そう言って手を出す八神。太一はその手を取り、八神と強く握手した。

END

NO・4 春風は甘く香る。賢くはない

三月二日、小郡学兵学校で二つの部隊結成式が行われた。一組と二組の生徒が休めの体勢で立たされる。

「えー、これより部隊結成式を行う。まずは校長より挨拶の言葉があります」

台のうえに立っていた教頭が降壇した。それと入れ替えに校長が登壇する。

「みなさん、おはようございます、今日はお日柄も良く……」

『あゝ、かつたるい。何で校長の話なんか聞かなきゃなんねえんだ？ 普段ならてきとうな理由をつけて保健室でやり過ごすのになあ。今はちよつと……』

「……でありますから、みなさんには人類の、未来のために、より一層頑張っていたきたいと思っています。それでは、このたびできる二つの部隊の隊長からお話をしてもらいましょう」

校長が降壇し、入れ代わりで二人の生徒が登壇する。ひとりには遼平で、もうひとりは木ノ下 皐（きのした さつき）という、二組の指揮官だ。

「まずは、八神くんから」

「はい」

一歩前に出る遼平。

「自分はこのたび、一組の指揮官になった八神 遼平です。よろしくお願いします」

遼平は、普段からは想像もつかないほどの正装をしている。いつもなら襟ボタンは開け放し、ネクタイなどはしない。まあ、この場合は仕方ないが。

「すでに我が隊の部隊名も決めてあります」

一組のみんなの期待が高まる。そんな嬉々として張り詰めた空気の中、遼平はポケットから紙を取り出す。それを見て、口を開く。

「部隊名は、7821部隊」

みんなの期待が地に落ちる音が聞こえそうなほど、場の空気が冷めた。

「以上で終わりです」

冷めた空気の中、遼平は後ろに下がり、気持ち悪いくらいの気をつけをしている。

「はい。次は木ノ下さんです」

「はい」

皐は、遼平とは対照的に優雅な仕草で一步前に出た。

「私がこの二組の指揮官の木ノ下 皐です。改めてよろしくお願ひします」

優雅に頭を下げる皐。その美しさに、男子生徒は皆釘づけた。もちろん太一も例外ではない。

「……（きれいな人だな）」

頬を軽く紅く染め、見入る。そんな太一を理利は少し恨めしい目で見た。

「そして、私の部隊名はハイドローズです。すみません、私が勝手に決めてしまつて」

二組の生徒達は誰も反対しなかった。むしろ賛成の意志すら見える。当然だろう。遼平とは人望の厚さが違う。

『うーん、たしかに美人だけどなあ。なんかこう、冷たい感じかな。お高くとまつてるような感じだし、オレの好みじゃねえな』

「えー、以上で部隊結成式をおわります。みなさん、学業と軍務に励んでください」

その解散の後、各自の教室に皆向かった。

4時間目が終わり、食事の時間。の前に、昨日の土魂号の適性選抜者を書いた紙が張り出されているので、みんなが掲示板の前に集まる。

「どうしたの、みんな？」

そんな中、太一だけがそのことを知らなかった。

「昨日のシュミレーションの結果が出るの！」

理利がうれしそうに太一に説明した。まるで自分のことのように。

「へえ。それで誰があれに乗るの？」

その一言を言った瞬間に、みんなが太一を見た。静まり返る。

「な、なに？」

「これみなよ！」

理利が太一の手を引き、紙に書かれた字を指差す。

「適性者……暁 太一……え？」

まわりを見る。みんなが太一を見ている。

「ぼ、僕!？」

いまいち状況が掴みきれない太一。

「すごいじゃない！」

理利が手を取って勢い良く振るが、太一はあわせようとせず、ガクガクと揺れる。

「え、な、何で僕？」

「おまえだけがゴルゴーンを倒したからだ」

一番年長の如月 左近（きさらぎ さこん）が太一の背中を叩きながら言う。

「はっはっは！ なかなかやるな、おまえ。オレですらできないほどのことをいとも簡単にやってしまうとはな」

「いや、全然簡単じゃなかったんですけど……」

「細かいことは気にするな。暁十翼長どの。」

「え？ 十翼長？」

太一はさらに状況を理解できなかった。そんな太一をみて、理利がフツツと笑ったあと、説明した。

「先生がね、あなたが士魂徽章を授与したら、一緒に階級もあげてやるって言ったの。如月さんはちょっと早とちりだったかな？」

顔を赤らめる左近。はっはっはと豪快に笑い、誤魔化す。

「まあ、でもおめでとう、暁くん。いや、暁十翼長さんかな？」
すこし考えるような仕草で言ってみる理利。太一はむず痒さで紅くなる。

「そんな、いいよ、今までどおり暁くん」

「そう？」

「うん。そうだ、井巻さん、一緒にお昼ご飯でもどう？ 僕がおくるから、綾香あやかにいかない？」

「いいよ。ちようど良かった、私もあなたを誘おうと思ってたの！ 理利がちようど言いおわったとき、教室のドアが開いた。

「失礼します」

入ってきたのは、二組の部隊長、臯だった。

「暁戦士はいらっしやいますか？」

名指しでの指定。どうやら太一に用があるらしい。

「僕に何かようですか？」

なにかしたかな。不安になりつつ、前に出る。

「少しお話があるのですが、お時間をいただけますか？ どうです、食事をしながらなどは？」

微笑みながらそう言う臯。太一は即OKしてしまいそうになるが、踏み留まった。

「いえ、すみませんけど予定が……」

そう言っつて理利のほうを見た。理利は不機嫌顔で別方向を見ている。

「私なら別にかまわないけど。どうぞ、美人と楽しくお食事でもなんでもしてきました」

理利は顔を背けたまま言った。太一は、えっ？ と、驚きとも疑問ともとれる表情で固まった。

そんな微妙な雰囲気などお構いなしに、臯は太一の腕を掴んだ。

「それでは、この人の許可ももらいましたし、綾香に行きましょう」

「ええ！？ い、井巻さん！？ あの、これは……」

「レディを待たせるのは失礼よ、暁くん。早く行ったら？」

顔を背けたまま手をひらひらとさせる理利。状況を飲みきれない太一。恨みや嫉妬の念を放つ生徒数名。

気まずい空気だ。

ここ綾香は学生たちの食堂のような所だ。ほとんどの生徒がここにくる。

そして太一は、男子生徒に人気のある皐と一緒にいる。太一は、皐の話がおわるまで男子たちからの身を刺すような冷たい視線に耐えなければいけなかった。

しかし、太一にはそれ以上につらいことがあった。それは、すぐ近く（真後ろ）に理利がいたことだ。背中合わせに座っているが、あきらかに何らかの気配を発する理利に耐えず気を配る太一。

『あらら、修羅場だね。どうなることやら。すべては皐の話の内容次第だな』

「あのー、お話とはなんでしょうか」

沈黙の中、太一が切り出す。

「そのことなら、食事をしながらでもいいでしょう」

微笑む皐。刺す視線。強まる理利の気配。

「あの、できれば早めにお願います。仕事などがあるので……」

嘘だ。昼休みが終われば授業が始まる。しかし、皐はそれに気付かない。

「そうですか？ ではお話をさせていただきますわ。実は遠……あ、いや、八神十翼長、いえ、いまは百翼長でしたね」

焦りつつ笑う皐。何がおもしろいんだろうと思う太一。

「話とは彼のことなのですが、あなたはどう思いますか？」

「え？ どうって？」

意外な問い掛けに、思わずきょとんとしてしまう太一。皐は眉の端を下げ、続ける。

「彼はあなたがたに迷惑をかけていませんか？」

「いえ、そんなことはないと思います。八神委員長はいい方だと思います」

さほど接触がないため、遼平のことなどよくはわからない。

なんでそんなこと聞くんだろう。太一はそんなことを考えていた。「そう、よかった。あの人が指揮官になるって聞いて、少し心配だったのですが、大丈夫そうですね」

優雅に微笑む皐。さしずめ深窓の美少女といったところだろう。

「なぜ僕に聞いたのですか？」

太一は皐に見とれながら聞いた。皐は意外そうに口を開く。

「聞いた話ですと、彼と一番親しいのはあなただということなので、あなたなら彼のこともわかるのではないかと思い、たずねたのです」「そうなんですか」

まあ、親しいといえば親しいけど。太一は浅く考えた。

「そういえば、ご予約がありましたのに、私のわがままでご迷惑をかけましたね」

皐ははつとし、突然非を詫びた。あまりにも突然だったため、太

一は一瞬返事に迷う。

「え、いや……。あ、あなたは八神委員長のことはどう思っているんですか？」

なにを血迷ったか、太一が唐突に質問した。

「え！？ わ、私ですか？ ……その、好いてます。あの人のことを」

皐は顔を紅らめ、気恥ずかしそうに答える。太一は内心、バカで一途な人なんだな、と思った。

(好きな人のことで、嘘はつきたくないんだな、きつと)

皐のその宣言を聞いて落ち込んだ男子生徒は、太一以外全てだったの言うまでもない。

『はは！ まいったな。今の彼女は恋する少女そのものだ。ここまでの暴走も、【恋は盲目】ていうことなのか。そこまで見抜けなかったオレの負け。可愛らしいところあるじゃん』

綾香内は、落胆色に染まっていた。

END

「改編予定です。しばらくお待ちください」（前書き）

昨日の話、携帯サイトでガンパレを見つけた。しかし、そこにあった情報は僕の知らないようなものばかりで、さらにその情報も断片的にしかわからないものだった。気がつくと、泣きながら情報を集めようとしてる自分がいた。僕もまだまだ子供だななどと考えつつ、自分の知っているガンパレは氷山の一角でしかなかったという失望感に襲われた。僕のガンパレに対する知識はライトユーザーのものでしかないということを思い知らされた。しかし、ここで立ち止まっただけではこの作品は完成しない。だから僕は自分の無知を呪う前にこの作品を完成させる。

「改編予定です。しばらくお待ちください」

朝の通学路、学校に向かう生徒達で賑わう。

「ねえ、井巻さん、昨日のこと、まだ怒ってる？」

太一が理利の表情を伺いながら聞く。

「別に、なんであたしが怒らなきゃならないの？」

理利は、前をまっすぐに見ながら感情を込めずに言った。

「だって、あのあと口きいてくれなかったじゃん。」

「そうだったっけ？」

「井巻さん、ごめん、謝るから許して。」

「なにを？」

「なにをって、その・・・約束、守れなかったし。」

「別にそのことなら怒ってないよ。」

「じゃあ、何に怒ってるの？」

「だから怒ってないってば！」

立ち止まって、太一のほうを向き怒鳴った。

「じゃあ、なんで僕のこと見ないで話してたの？」

「・・・。」

理利は黙った。

「何に怒ってるのかわかんないけど、どうしたら許してくれる？」

太一が聞く。理利は少し考えて、口を開く。

「名前で呼んで。」

理利はそういったあと、少し顔を赤くした。

「え、名前？」

「うん、そうしたら許したげる。」

「そ、それじゃあ、理利・・・さん。」

「・・・。まあ、いつか。それじゃあ、私も太一くんって呼ぶね。」

二人とも笑う。

四時間目がおわり、昼食。

「太一くん。お昼おごって。」

「うん、いいよ。」

「今日も仲がいいな、二人とも。」

先生が割り込んできた。

「あ、先生。太一くんの授勳式はいつですか？」

「ん？ああ。授勳式は明日だ。土魂徽章が明日届くからな。」「わかりました。」

そういつたあと、二人は教室を出た。

「おまえは、暁の中にいなかったか？」

先生が太一のいたあたりに話し掛けた。

『へえ、先生もオレのことわかるんだ。意外と多いんだな。』

「まあな。それより、おまえは誰だ？青じゃあなさそうだな。」

『フツ、聞いて驚くなよ。オレのOVERSは、オリジナルのやつをコピーして作ったんだ、このオレが。』

「ほお。」

『あてて、もっと驚けよ。』

「おまえが驚くなつていったんだろ。」

『・・・もういい。とりあえず、手作りだからいろいろ欠陥があつて、こういうことになつてんだけどな。やつちまつたぜ。』

「そうか、大変だな。だけどオレの質問の答えにはなつてないな。というより、噛み合つてなかったな。」

『やっぱり？しょうがない。オレは暁 太一。第七世界の人間だ。』

「そうか、よろしくな。」

『ああ。っと、あいつのどこに行かなきゃ。離れたままはちよつときついからな。』

所かわつて綾香。ここはいつも学生で賑わう。メニューも豊富で、戦時下なのに料金も安いというとてもいい店なのである。

「理利さん。」

「なに？」

「理利さんのお父さんとお母さんは、どんな仕事をしてるの？」

「なに？急に。」

「その、なんとなく。」

「なにそれ、まあいいけど。あたしの父さんは小さな喫茶店の店長をしていて、お母さんはその店員。つまり夫婦で経営してるの。」

目立たないけど自慢の親よ。」

理利がうれしそうに話す。

「太一くんのお父さんやお母さんはなにをしてるの？」

「僕の両親は軍で兵器開発部にいるんだ。」

「へえ、すごいじゃない！」

「うん、だけど……。」

「どうしたの？」

「理利さんは親と一緒に休みの日とかに遊びに行ったことある？」

「うん、しょっちゅう。」

「いいな、僕は一度もない。」

「え？一度も？遊園地とか、動物園とか連れてってもらえないの！？」

「うん、一度も行ったことない。」

「そうなんだ……。」

綾香の店員が料理をもってくる。笑顔を作り受け取る太一と理利。綾香の料理はおいしかった。

次の日、朝のHR。

「よし、みんないるな。」

先生が室内を見回す。

「ん？空席があるな、だれた？」

「八神委員長です。」

太一がいう。

「またあいつか。まあいい、暁さえいればな。これから受勲式をは

じめる。暁、前へ。」

「はい。」

太一が先生の前に出る。

「ほら、士魂徽章だ。これでおまえも戦車兵だな。」

先生の手から勲章を受け取る太一。拍手がわく。

「ありがとうございます。」

敬礼をする太一。その胸には士魂徽章が輝く。

「それじゃあ暁、席に戻れ、授業をはじめろぞ。」

放課後、ハンガー内。

「おめでとう！」

クラッカーをならし、祝う一組のみんな。

「おめでとう、太一くん。」

理利がほほ笑みながらいう。

「ありがとう。」

「もし戦鬪があつたら、おまえが主力だ。たのむぜ。」

関城 優輝が、背中を叩きながらいう。この男子は背中を叩くのが好きなのか、と太一は思った。

「しかし、すごいな。おまえ、あれに乗るんだろ？うらやましいな。」

「よし、おまえら！今日は徹底的に祝うぞ！」

優輝が士魂号を指差しながらいった。

左近がコーラのケースを肩に担ぎながら言った。一人を除いて応呼

する一組のみんな。しかし、その平和な時間を裂くように防災サイ

レンが鳴る。全員がそれを理解するのに5秒もいらなかった。

END

「改編予定です。しばらくお待ちください」（後書き）

次回はいよいよ……。今回も新キャラが登場し、ますます加速する物語。クラスの人数は24人、まだまだキャラは出てきまず、乞うご期待。

「改編予定です。しばらくお待ちください」（前書き）

このタイトルに限界を感じている作者より：僕は今もう一つ作品を作っていますが、そちらのほうはネタ切れを起こしているのに、こちらは円滑に進んでいるような気が・・・。まあいいとして、これを見てくれている人へ、交流サイトの秘密基地の小説のヒントというところでキャラを募集しています。自分の考えたキャラを登場させたいかたはどうぞ。

「改編予定です。しばらくお待ちください」

「筑紫野戦区に幻獣出現。戦闘員は戦闘準備ができたい、トラックに乗り込むように。パイロットは士魂号を輸送トラックに乗せて、コクピットで待機するように。整備員は整備トラックに機材と応急修理用の生体部品を積み込みしだい搭乗するように。ウォードレスの着用を忘れるな。」

先生がアナウンスをしている。だが、みんなはもう準備をおわらせて、戦地にむかうところだった。

「あいつら、やけに早いな。頼もしい限りだ。」先生は窓から見える三台のトラックを見送りながら、そう呟いた。

「ねえ、太一くん。」

無線から理利の声が聞こえてくる。

「なに、理利さん。」

「何だかあたし怖いな、初めての戦闘。」

「理利さんは整備員だから戦闘はしないでしょ。」

「それはそうだけど、恐いの。太一くんは恐くないの?」

「怖いよ、すごく。だって、幻獣と直接戦うんだよ。」

「それもそうだね。」

「はあ、逃げ出したいよ、ほんとに。」「逃げちゃダメだよ!太一くんが主力なんだから。あなたが逃げたら、勝てっこないんだから。」

「わかってるよ。でも……。」

「それに、あなたがいなかったら、誰が私たちを守るの?誰が幻獣を倒すの?」

「……。そうだよ、僕が理利さんやみんなを守らなきゃ、士魂号に乗った意味がない。」

「おあいにくさま、俺たちは自分の身ぐらい自分で守れますよ。」

左近が割り込む。

「おまえら、二人仲良く話すなら通信回線を全員に開くなよ。全部筒抜けだ。」

「あ、まちがえた!」

みんなが笑う。

「も、もう切るね!」

そうして、理利との無線が切れた。

「・・・全部、筒抜け?」

太一は恥ずかしくなった。そうしている間に筑紫野市が見えてきた。士魂しの砲撃や銃撃の音が聞こえる。町のなかは、明かりが落ちていくのに明るかった。太一がふと目をやるとモコス（ホバー戦車）の大破したものが転がっている。「このあたりで止まれ、展開するぞ。」

急に無線から遼平の声が響いてくる。前方を見ると、指揮車がいた。「この辺りには敵はいない。整備班はここに臨時ハンガーを展開、戦闘員は戦闘準備を整えろ!」

みんなは遼平のいうとおりにテキパキと動く。信じられないほどの速さで準備が終わる。

「スカウト（戦車随伴歩兵、ようするに歩兵）は暁機の援護を、暁は敵主力を探しだし、撃破しろ!」

「了解!」

全員が行動を開始する。暁はモニターを確認した。敵の位置と名前が表示されている。

（これはどういう仕組みなんだろう）

「暁十翼長、敵の情報をください。」

女性で唯一の戦闘員である杉宮 純すきみや じゅんが無線で聞いてきた。

「敵は、ゴブリンが12体、リーダーが6体、主力と思われるナーガが2体です。」

「以外と少ないのね。これならいけるかも。」

「油断はするなよ、純。暁十翼長、雑魚はおれらに任せて、あんた

はナーガをねらってくれ。」

左近は、この部隊のスカウトのリーダー的なものである。

「わかりました。皆さんも気を付けて。」

暁は目標に向けて歩きだす。スカウトたちはそれにつづく。

整備トラックは、各部隊がそれぞれの場所で展開するため、弾切れを起こした場合または、負傷した場合などは最寄りの部隊のトラックで補給などを受けることになる。

「誰か、衛生兵はいないか!? 負傷者を手当してくれ!」

「弾薬が切れた! 15mm弾をくれ!」

「土魂の砲弾はないか!? 急いで補給してくれ!」

目が回るほどの忙しさ、次から次へとくる注文、休む暇などない。ときには幻獣が接近してくることもある。臨時ハンガーが潰されるということも少なくない。命の危険度ならスカウトにも負けないだろう。

「っ! ダメね、死亡を確認。次は誰!？」

衛生兵の高橋たかはし 由美子ゆみこが次々と負傷者を治療していく。

「すごいな由美子さん、たった一人であんなに頑張ってる。」

理利が土魂へ砲弾を搭載しながら呟く。100キロ近くある砲弾ケースを抱えられるのはウオードレスのおかげだ。

「おい! よそ見をしないでちゃんとやってくれ!」

「は、はい! すみません!」

理利は急いで抱えている砲弾ケースを乗せた。弾薬を搭載した土魂しが急発進する。

「ふう。」

理利が一息漏らしたときだった。

「理利ちゃん! あぶない!」

その声に反応し、振り返る理利。理利の目には、こちらに飛んでくるトマホークが映った。

「!」

間一髪、両腕で受けとめた。後ろに2、3メートル吹き飛ばす。

「このやるう！」

一人のスカウトがゴ布林リーダーに向け、弾の雨を浴びせる。

「大丈夫!？」

由美子が理利のもとにかけよる。理利の両腕からは白い血がしたたつていた。わずかに赤い血も混じっている。

「骨には異常ないみたいね。一応止血とウオードレスの修復はしておくわ。」

由美子は手際よく作業をこなす。

「ありがとうございます。」

「お礼ならいいの。これがあたしの仕事だから。」

由美子の顔は治療のために浴びた白と赤の血で彩られていた。

「さつき、ゴ布林リーダーが補給トラックの近くにいたけど、

理利さん、大丈夫かな？」

太一はモニターを確認しながら言った。

「暁十翼長、彼女の心配かい？」

左近が茶化すような声で言った。

「な、ち、違います！」

「どつちが違うんだ？」

「え？」

太一は左近の言ったことが理解出来なかった。

「彼女が違うのか、心配してるのが違うか、だよ。」

「も、もちろん、彼女のほう……。」

語尾にいくにつれて小さくなる声。

「はっはっは！照れてやがる。」

左近が笑う。

「無駄話しないで戦闘に集中しなさい。」

純が左近をしかる。左近はへいへい、と適当な返事をした。

「左側面よりゴ布林が接近しています。注意してください。」

「はいよ！」

5〜6匹のゴブリンが建物の間から迫る。弾の雨を浴びせる左近たち。太一は先の角から来るナーガに意識を寄せた。

「……。きた！」

ナーガの白い顔が角から覗いた。次から長い体がぞろぞろと出てくる。ナーガが太一に気がつき、攻撃態勢をとった。

「食らえええ！」

アサルトライフルを連射する太一。しかし、たいして当たりはしなかった。

「？、なんで？」

太一は撃ちながら考えた。

「そうか！反動だ！」

太一の考えは正しかった。シュミレーションではコクピットまで振動することはなかった、そのためブレることはなかったが、実戦ではコクピットにも振動が伝わってくる。

「まずはこの振動に慣れなきゃ。」

消えゆくナーガを見つめながら太一は呟いた。

END

「改編予定です。しばらくお待ちください」（後書き）

前の作品を見なおして気がついたことがあります。それは、一話ごと
にミスをしていることです。自分的には確認はしているつもりな
のですが……。おっと、次回予告させていただきます。初の戦闘、
暁たちは生き残ることが出来るのか。そういえば、気がついたかた
もいるかも知れませんが、介入者暁の姿をこの話では見かけませ
んでしたね、どうしたんでしょうか？

「改編予定です。しばらくお待ちください」（前書き）

ガンオーケストラ青が欲しい作者より：この作品を作っていると、とても楽しくなる。「次はどうしよう」「このキャラならどう話すだろう」などを考えると楽しくなります。（小説家の人ならわかりますよね？）ガンパレなのでネタも湧き出てきます。まだまだ行きますよ、100話以上書いている方もいますからね。

「改編予定です。しばらくお待ちください」

「なんでそこにいる？」

指揮車の中で遼平が宙に向かって話し掛ける。

「え？なにか？」

操縦者の榎本えのもと 奏恵かなえが遼平に聞く。

「いや、おまえにじゃない。ほら、暁が動きだしたぞ、ちゃんと追え。」

「は、はい！」

「で、なぜそこにいる？」

『あなたの指揮を見にきたのさ。』

空中から答えが返ってくる。しかし、その声は奏恵には聞こえてはいなかった。

「うつとうしいから暁のところに帰れ。」

『ひでえな、せっかくきてやったつつうのに。』

「こなくていい、帰れ。」

『そんなこと言うなよ。』

「うるさい、帰れ。」

『てめえ、なんだよ。一言目には帰れ帰れって、それでも指揮官が？』

「どつでもいい、帰れ。」

『・・・ひでえな。もういい、せっかく奴らの仲間が近づいてる』
とを知らせにきたつてのに。』

「なに？おい、どういうことだ、おい！」

「は、はい！？なんでしよう！？」

「・・・奴ら？まさか・・・。」

「あの一・・・。」

遼平は奏恵を無視して考え込んだ。

「次の角を右に曲がる、そしたら次は、えつと……。」

太一は左のモニターを見ながら考え込んだ。次に敵がどう動くかを考えていた。このモニターに映し出されているものは、地形まではおつていないため、戦略を考えるのは難しいのである。そのため、ほとんど勘で戦略をたてる太一。

「俺たちが偵察してこようか？」

左近がいった。

「いいんですか？」

「なに、構わねえよ。それも俺たちの仕事だからな。」

「それじゃあ、地形データを調べて送ってください。」

「あいよ、まかせな！聞いたな、おまえたち、行くぞ！」

左近の一言で、解散するスカウトたち。あるものは道を走り、あるものは建物を登りながら、進む。そして、次々と地形データが送られてくる。

「皆さん、ありがとうござん……！！杉宮さん、後ろに幻獣が！」

太一がその通信をいれたあと、悲鳴が聞こえる。左近が叫び、ライフルを撃つ。純の後ろにいたゴブリンリーダーがモニターから消える。

「純、大丈夫か……！」

左近が純のもとへと駆け寄る。純のウオードレスは大破状態だった。トマホークの直撃を受けた部分からは白と赤の血が吹きだす。下は小さな水溜まりのようになっていた。

「おい、純、しっかりしろ！」

「左……近……ドジツた……。」

「わかった、わかってるからもうしゃべるな！暁十翼長、オレはこいつを運ぶため、一時離脱する。」

「わかりました！」

左近は純を抱きかかえ、走る。

「しっかりしろ、この程度なら由美子が治してくれる。」

「左近……ごめん……。」

その一言を言った後、純は頭をたらし、動かなくなった。

「おい、純・・・純？」

揺する左近。しかし、無反応な純。胸も上下していない。出血は止まっていた。「冗談だろ、おい、おい!!」

純の安らかな顔が月光に照らされる。左近は、空に向かい、吠えた。

「そんな、そんな・・・。」

太一は、前方にいるナーガに連射するが、ほとんどあたらない。太一の視界はぼやけていた。

「・・・。」

そのうち、アサルトライフルの弾が切れた。ナーガはこの気を逃さず、攻撃態勢に入る。

「!?!? おい暁!」

太一はなおも引き金を引き続けていた。ナーガの額が光を帯びる。

その刹那、20mmライフル弾がナーガの額を貫いた。

「てめえら、ゆるさねえ!」

左近が単発のライフルを連続的に発射する。その攻撃を受け、消えるナーガ。その後ろにいたゴブリン2匹も左近によって幻へと帰っていった。

「杉宮さんが・・・。」

左近たちのやりとりは、回線を通じてみんなが聞いていた。

「杉宮さんが・・・死んだ?」

理利はぼうぜんと立ち尽くしていた。その後ろから、最後のゴブリンが、近づいていることに気付かずに。ゴブリンが理利に近づく。あと3メートルというところで胴体を分断されるゴブリン。

「!?!? なに!?!?」

理利が後ろをむく。

「油断していたら、死にますよ。」

日本刀をしまいながら南川^{みなみかわ} 涼子^{りょうこ}が理利に言った。

「あ、ありがとう。」

「今のゴブリンで最後です。僕たちは、戦闘に勝利しました。」
押し殺したような感じの声で太一が言った。

「わかった。全員撤収準備、杉宮 純戦士の遺体は丁寧に扱おうに。」

遼平は普段と変わらない声で言った。

全員が撤収準備にとりかかっていると、無線から左近のかすれた声が聞こえてきた。

「……生まれ出……闇を払う……それは子供の頃……」
あまりにも聞き取りにくかったが、左近は歌を歌っていた。ガンパレードマーチを。その歌は全員の心に響いた。

「いつまでそうしているつもりですか？」涼子が左近に言った。

「あなたも早く撤収準備を手伝いなさい。」

「み、南川さん！」

理利が涼子に近づいた。

「すこしは左近さんの気持ちを考えてあげて！」

「いや、いいんだ理利ちゃん。」

左近が立ち上がった。

「さ、左近さん……。」

「さあ、帰る準備でもするか。純が死んだことを、あいつの両親に知らせてやらなきゃな。」

左近は近くで散らかっていた砲弾ケースを次々とトラックに積み込んだ。

「悲しむことだけが死者に対する弔いではない。立ち直り、その死を乗り越えて自分なりの道を進む。むしろそれが本当の弔いと言うもの。」

涼子が微笑む。

「あの方もそれに気付いたようですね。」

理利は涼子を見つめている。

「何をしているの、私たちも手伝いますよ。」

「あ、はい。」

理利はふと、士魂号を見た。まだその悲しみを乗り越えられていないパイロットを乗せた士魂号を。

END

「改編予定です。しばらくお待ちください」（後書き）

・・・この話は書いてる途中、悲しくなりました。しかし、涼子の言つとおり「悲しむだけが弔いじゃない」ですからね。僕も彼女の死を乗り越えて、続きを書きます。ちなみに南川 涼子は時空の剣士さんに考えていただいたキャラです。他の読者のかたもどんどん考えてください。まっつてます。

「改編予定です。しばらくお待ちください」（前書き）

漢字だけでタイトルを作る理由がかっこいいからの作者より：前回の話で左近が使っていた武器ですが、あれは普通の人間にはとても扱えるものではありません。通常のライフルの口径は7mm前後です。たとえウオードレスを使用しても反動はあるはず。ましてや連射など……。ところで今回はあの二人がお近付きになります。

「改編予定です。しばらくお待ちください」

最初の戦闘から2日が経った。一組のみんなには活気が戻ってきていた。一人を除いて。

「おっはよー」

「・・・うん」

朝の通学路で理利と太一が会う。しかし、太一には活気がなかった。

「まだ落ち込んでるの」

「・・・」

太一は反応しなかった。

「もう！ いい加減にしなさい！」

理利が怒鳴る。何事かとまわりの生徒達が理利を見る。

「いつまでそうしてるつもり!？」

「・・・」

「涼子さんが言った、悲しむだけが弔いじゃないって!」

「・・・悲しんでるわけじゃない」

太一がやっと口を開く。

「僕は後悔してるんだ」

「後悔?」

太一が顔を歪める。

「僕が、詳しい地形データが欲しいなんていったから、杉宮さんは・

・・・」

「そんなことない!!」

理利が太一の言葉を遮る。

「もう！ バカなんだから・・・」

理利が悲しみを湛えた顔で言った。

「自分をそんなに責めたって、何にもならないじゃない」

「でも、僕があんなことを言わなければ・・・」

「だから！！自分を責めないの！過ぎた事をいつまでも引きずっちゃダメ！左近さんを見らいなさい！一番つらいはずなのに、立ち直ることが出来たんだから！」

「僕はあの人ほど強くな・・・」

パンツという乾いた音が響いた。

「バカ！！もう知らない！」

理利が泣きながら言った。そして、そのまま学校へ走っていった。

「僕が何したっていうんだ」

そこには頬を押さえながら立ち尽くす太一しかいなかった。

その日、太一は学校に姿を現さなかった。

「おや？ 暁は休みか？ 珍しいな」

理利は、ずっと下をむいていた。

時計が7時を差していた。自室で布団にくるまる太一。その頬にはいくつもの涙のすじができており、鼻水を拭いたチリ紙が小さな山を築いていた。

「・・・僕だつてわかってる、このままじゃダメだつてことぐらい独り言をもらす。

「でもダメなんだ、いくら元気を出そうとしても、押し潰されるんだ」

誰が聞いているわけでもないのに、一人語る。

「・・・」

その時、コツンツと何かが窓にあたる。太一はビクツとしたあと、窓のほうにむかった。カーテンを開けて窓の外を見ると、理利がいた。

「太一くん、その・・・ぶつてごめんね」

理利が斜め下を向きながら謝る。

「ねえ、太一くん、これから公園にきてくれない？ もっとちゃんと謝りたいから。ダメならいいの、でも、待ってるから」

そついうと理利は、走っていった。

「・・・」

無言でカーテンを閉める太一。

はなびら公園。ここは町の人たちの憩いの場所である。結構広めな園内には、川が流れており、公園の中心には池がある。別名、中央公園。

「太一くん・・・こないな」

理利が手をこすりながら言った。夜はまだ冷えるのである。ふと時計に目をやると、10時を回っていた。

「こんな遅くにくるわけないか・・・嫌われちゃったんだよね、きつと」

理利は急に胸が苦しくなった。涙が一粒、二粒流れ落ちる。

「当たり前だよ、いきなり殴つたんだし。何であんなこと・・・したんだろ」

涙を拭い、ベンチから立ち上がる。もう帰ろう、そう思い、公園の出口のほうをむく。

「・・・あれ？」

その出口から一人、こつちにむかって走ってくる人影があった。その人影は、理利の目の前で止まる。電灯で顔が照らされる。

「はあ、はあ、ごめん、こんなに待たせて」

理利の目から涙が溢れる、その涙を手の甲で拭うが、止まらない。

「り、理利さん、ごめん」

太一が理利の様子にあたふたしている、理利が倒れこんできた。

「朝は、いきなりぶつたりしてごめんね。あとき私、あなたが弱音を吐いたから、つい・・・。あなたの気持ちを考えもせずにあんなことして、本当にごめんなさい」理利は泣きながら言った。

「ううん、僕はあるとき、殴られて当然だったよ。いつまでもくよくよしてちゃダメだよ。それに僕の方こそごめん。つまらない意地を張って、理利さんをこんなに待たせちゃって。」

理利が顔を上げる。その顔には笑顔があった。

「じゃあ、これでおあいこでいい？」

太一も思わず笑う。

「いや、僕のほうが少し悪い。」

太一はそういつてポケットから、紙を二枚取り出した。

「そのお詫びに、明日遊園地に行かない？ダメなら諦めるけど」

太一は一旦、理利から離れ、チケットを一枚差し出した。理利はそれを受け取った。

「いいに決まってるでしょ。ちゃんと連れてってね」

理利はそれ以上はないと思うほど幸せな気持ちになった。それは太

一も同じだった。

「じゃあ約束」

太一は小指を立てた。その小指に理利の小指がからんだ。

「切った！」

二人は顔を見合わせて笑った。

END

「改編予定です。しばらくお待ちください」（後書き）

みんなの歳を発表したいと思います。『いきなりだなおい！』太一、16歳、理利、16歳、遼平、18歳、皐、17歳、優輝、17歳、涼子、16歳、奏恵、15歳、今は亡き純、18歳、由美子、17歳、弘、意外と32歳、左近、19歳。今いるキャラはこんなものかな。ちなみにキャラは随時募集中です。それと次回予告、ずばりデートです。それで2000文字どう埋めようか迷っています。ちなみにリンク入りめざしています。よろしく！

「改編予定です。しばらくお待ちください」(前書き)

この作品を結構気に入っている作者より：まずはじめに、麻理奈コエ。はい、すみません。今回の作品の感想です。それより、これのキャラは随時募集です。メッセージでもかまいません。そうしたら、もれなく作者のメルアドプレゼント!!(いらないですね)

「改編予定です。しばらくお待ちください」

太一は走っていた。その理由は、昨日にさかのぼる。

「それじゃあ、明日公園で」

「うん、ばいばい」

学生寮の前で別れたあと、太一は自室に戻り、布団に潜る。そして朝、4時に起きてしまう。

「ふあゝあ、早く起きすぎだな、これじゃ約束の時間までまだまだ・・・あれ？ 約束？」

太一は昨日の理利との会話を思い出す。

「約束・・・してない!!」

太一は布団から飛び出すと、大急ぎで着替えた。

(理利さんのことだから、かなり早めにきてるだろうな。待たせちゃ悪い)

そう考えながら部屋を飛び出す。

太一は公園の出入口についた。向こうの屋根つきベンチに理利が横たわる。

「やっぱり」

太一は呼吸を整え、理利のところに行く。理利は寝息を立てていた。「起こしたら悪いな。このまま寝かせてあげよう」

太一は着ていた上着を理利に掛けた。

「起きたらちゃんと謝ろう」

「何ですか!？」

朝の職員室で怒鳴り声が響いた。休日出勤の先生たちが何事かと目を向ける。

「このあいだの戦闘で欠員がたのでしょう! なのにどうして!

？」

涼子が攻め立てる。

「だから、ダメだと言ったらダメだ。おまえは出せない」
先生が真剣に答える。

「それに欠員補充のことならもう決まっている。いまさら変えられん」

「・・・わかりました、もういいです。すみませんでした」
そう言うと涼子は、乱暴に扉を開け、職員室を出た。
「まったく」

先生はため息をついた。他の先生方は啞然と見ていた。

「どうやらまたダメだったようね」
廊下を進む涼子に誰かが話し掛けた。

「余計なお世話です」

涼子は立ち止まって答えた。

「断られる理由は、あなたにあると思うんだけど」
壁に背を預けながら藤井 ふじい 麻理奈 まりな が言った。

「私に？」

涼子は聞き返した。

「聞いた話によるとあなた、恋人の仇を取りたいんだって？」
涼子はギクツとした。まだ誰にもそのことを話してはいなかったからだ。

「フフツ、私に隠し事を出来るなんて、思わないことね」

麻理奈は涼子の中を見透かしたかのように微笑んだ。

「復讐しか考えない人、先生は嫌いなものよ。知ってた？」
微笑みながら言う麻理奈を涼子は睨み付け、歩き去る。

「復讐するだけでもまた、弔いにはならない」

麻理奈は一人呟いた。

同時刻、公園。時計の針は7時をさしていた。

「・・・うん」

理利が目を覚ます。

「おはよう、理利さん」

その声にはっとして、跳ね起きる理利。

「あ、れ？ 寝ちゃった？」

「うん」

理利の顔が赤くなる。

「顔・・・みた？」

「え、いや・・・少し」

理利は顔を隠す。

「あ、そ、その、ごめん」

「ううん、いいけど」

理利が顔を上げる。真っ赤だ。

「それと、昨日時間言ってなくてごめん」

「もういいよ。早く、行こう」

理利が笑顔で言った。まだ少し赤い。

「うん」

二人は手をつないで歩きだした。

「うわあ、すごい・・・」

太一は、遊園地の入り口で中を見ていた。

「さ、早く行こう。あたしが案内してあげる」

理利が太一の手をひいて走る。

「あわ、わ、もう少しゆっくり」

転びそうになりながらついていく太一。

「ねえ、あれに乗ろう！」

理利のたびたびの一言に太一は地獄を見ていった。この遊園地は九州地方、いや日本全国でも一二を争うほどの絶叫マシンの保有数に加え、理利の絶叫物好きがとどめをさし、太一は立つのがやっと

の状態だった。

「次はあれに・・・太一くん、大丈夫？」

もはや太一の目は焦点があつていなかった。無理もない、2分に一度は絶叫マシーンに乗っているからだ。ましてや太一は、今まで一度も乗ったことがないのだ。太一は恐怖を通り越し、放心の域に達していた。

「え、うん、大丈夫だよ。次はあれ？ 楽しそうだね」

もはや棒読み。

「・・・少し、休む？」

「・・・うん」

太一は近くのベンチに腰掛けた。理利はどこかに走っていく。しばらくすると理利が戻ってきた。

「はい、これ使って」

理利が濡れたハンカチを太一に手渡した。

「ありがとう」

受け取ったハンカチを額に付ける。ひんやりと気持ち良かった。

「ごめんね、無理矢理乗せて。そう言えば太一くんって、初めてだったよね」

理利が隣に座る。

「うん」

「だったらもうちょっと静かなのに乗れば良かったね。ごめん」

「いや、理利さんが楽しめていれば、僕はそれでいいよ」

「・・・」

それから理利は、絶叫ものを避け、ゴーカートなどに乗った。太一は今度は心から楽しんだ。気が付くと、日がもう落ちてきていて、夕日が綺麗だった。

「ねえ、最後はあれに乗る」

理利は観覧車を指差し言った。

「うん」

二人は観覧車に向かった。

「うわー！ いい眺めだ！」

太一が窓の外をみながらはしゃぐ。

「あ、ほら、学校が見える！ 寮もだ！」

「フフツ、気に入った？」

「うん！」

子供のように返事をする太一。その目は輝いていた。

「ねえ、理利さん、その・・・」

「なに？」

「また、いつか一緒に来よう」

「うん、いいよ」

二人は微笑んだ。

おまけ

「まったく」

先生はため息をついた。

『ほんと、まったくだな』

ビクツとする先生。

「おまえ、いつのまに、つうかいつからいた？」

『4時ごろかな？ はあ、あいつから離れ続けるのは疲れるな』

「なら何でここに？」

『あいつ、これからデートなんだよ。覗き見る趣味はねえしな』

「ほお、それは微笑ましいな」

お茶をすする先生。

夕方ごろ。

「あれ？ 理利ちゃんと暁十翼長は？」

由美子がみんなに聞く。

「そっぴや見ないな」

左近がまわりを見回す。

「あの子たちならデートに行ったわよ」

麻理奈の一言にみんなが振り向く。

「マジか？」

優輝が頭をかきながらいった。

「とうより、麻理奈さんはどうして知ってるんですか？」
奏恵が聞く。

「フツ、お姉さんは何でも知ってるの」
麻理奈は笑う。

END

「改編予定です。しばらくお待ちください」(後書き)

次回は考えていません。どうしよう。そうだ、介入者暁の話にしようかな。

「改編予定です。しばらくお待ちください」(前書き)

仮面ライダー好きで、ガタツクの攻撃はモンハンからきてると思っている作者より：今回の作品について。正直、よく知らない人が読むと、「なんじゃこりゃあ!？」な作品になってます。感想を言うと、明日番コエー!という感じですね。それと、キャラは随時募集中です。

「改編予定です。しばらくお待ちください」

「太一、太一！ 起きなさい！」

「なんだよ、うるせーなー、今日は日曜日だぜ？ ゆっくり寝かせてくれよ。昨日の合宿で疲れてんだから」

「はいはい、わかってるから、さっさと起きて朝ご飯食べちゃいなさい」

「ちえ。せつかく疲れをいやそうと思ったのに」

俺はあくびをしながらベッドからおりる。下へ行くと、うまさうな匂いがする。俺は椅子に座る。

「いったただっきまーす」

俺はがつつく。

「こらこら、そんなにあわてないの。まったく」

食事を終え、テレビをつける。今の時間だと、【変身！！】とか叫んで、変なスーツ姿になって、変な生きものと戦う特撮ものやっているが、興味がない。他のチャンネルを適当に押したあと、切る。

「さつてと、なにすつかな」

何もすることがないので、二階に戻る。ベッドに横たわる。昨日の疲れが残っているので、うとうととしてきた。

『あ、おいコラ！ 何勝手に人の過去暴露してんだよ！』

現在、データの整理中です。そのため、データを再生中です。いいでしょう、減るものではないのですから。

『・・・感じ悪いな。もういいよ。』
了解、継続します。

「太一、電話よー」

だれだよ、せつかく気持ち良く夢の世界に行こうとしてたのに。

「太一、早くしなさい！」

「はい、今いくー」

めんどい、誰だよ。そう思いつつ、受話器を取る。

「もしもし、どちら様？」

「やつほー！ あたしだよ。さっそくだけどうちにきてー」

悪魔だ。悪魔の声が聞こえてくる。

「・・・今、悪魔とか考えたでしょー！」

そしてエスパーだ。

「まあ、いいけど。とりあえずうちにきて」

「やだつて言ったら？」

「学校の校門ではりつけね」

・・・こいつはやると思っただらかならずやる。前に一度だけ逆らったことがあるが、川に突き落とされた。そんな記憶を思い出しつつ、
「わかった」

と答える。

『バカにすんなよ、おまえら！ マジなんだからな！ あんときや死ぬかと思った。あ、ちなみに電話の相手は神楽かぐら 明日香あすかだ。ほんと、悪魔だぜ』

その悪魔のことが好きだったのは誰です？

『・・・ほんと、いやなOVERSだな』

どういたしまして、再生を継続します。

「あ、きたきた」

笑顔で出迎える。何を企んでやがる？ こいつ。「よう、太一」

海斗かいと？ なんだ、こいつもいたのか。

「じゃ、行くか」

「行く？ どこに？」

俺が聞くと、二人は声を合わせていった。

「ゲーム買いに」

信じらんねえ。わざわざゲーム買いに・・・そのために・・・それ

だけの……。

「たったそれだけのために俺を呼び出したのか!？」

二人がうなずく。

「……帰る」

「帰ったらクラスのみんなでイジメるよ？」

行くしかない。

『見ててわかるだろ？ あいつは本物の悪魔だ』

なんでそんな悪魔が好きなのですか？ 私にはわかりません。

『わからなくていい。もう言わないでくれ』

それでは継続します。

このあたりで一番品揃えのいいゲーム専門店、てんぼつぼ。ネーミングは最悪だが、ゲーマーにはたまらないほどの品揃えだ。海斗は相変わらず見入っている。

「違うでしょ海斗」

海斗が明日香にみみをひっぱられる。やすいコントだ。そんなことより俺は、さつき店の前で会った男が気になっていた。とくに特徴があるというわけではないが、その男の頭の上数十メートルに、不思議な穴のようなものがあつた。

「……あれ、なんだつたんだろ」

「コ〜ラ！ 考えるためにきたわけでもないぞー!」

明日香にみみをひっぱられる。

「わかつたわかつた。だから放せ!」

痛い……。

『今となってはいい思い出だな……』

帰りたいですか？

『……』

でも諦めてください。出られませんか。

『……』

過去を振り替えて、未来を見つめてください。あなたの過去は私

の中にあります。そして、未来へ進むのはあなたです。見ることはできないのなら、飽きるまで見ましよう。聞くことしかできないのなら、タコができるまで聞きましょう。あなたが語り、だれも耳を貸さないときは私が聞きましよう。それが、私とあなたの運命なのですから。

『・・・おまえ・・・』

それでは、処理を継続します。

「あつた、これこれ」

明日香が一つのソフトを手取る。

「はい、買っよ」

押しつけられる。

「買わないと、島流しね」

さすがにそれはないだろう。しかし、目は本気だ。

「わかったよ」

俺は明日香からソフトをひったくり、買う。

「まいど」

「これでいいんだろ」

「オツケー！ さ、帰って誰が一番早くクリアできるか比べよう！」

「こいつは、まったく」

しょうがないので、家に帰る。

「えーと」

部屋でソフトを見る。

「ガンパレード・マーチ？」

あれ？ 昔、聞いたことあるような、確か親父の部屋に・・・。

『そうだ、あの時だ。あれが始まりだった。』

「えーと、確かここらへんに・・・あつた！」

かなり埃が積もっていたそれを押し入れから引き出した。

「ケホッ、ゲホッ」

咳き込む。まあ無理もない、親父がいなくなっただけからもう10年、一度も整理したことがない。母さんがいうには、

「押し入れの中のものささわるな」

だそうだ。

「知ったことか！ 勝手に消えたくせに偉そうに命令すんなっての！」

そう言っただけ俺は箱を開ける。中には、一つのコピーキットと書かれた小さな箱と、説明書のようなものが入っていた。

「儀式魔術ガンパレード23複製使用方法？」

太一はその時、頭のなかにある記憶がよみがえってきた。

「また失敗か。何度失敗すれば気が済む？」

「すまない、しかし順調だ。見てくれ、人の形をしている」

「ほう。それで、使えるのはいつできる？ あの方はもう待ちきれない、と言ったご様子だ」

「も、もう少し待ってくれ！ だいたい、世界移動存在を人の手で作り出すなど無謀な話・・・」

「もういい、こちらはシオネ・アラダのクローンに成功した。試作的にあれらを移動させる」

「な、なんだって!？」

「わかりやすいように言っただけ。おまえはお払い箱ということだ。さっさとその出来損ないを持ってここから消えろ」

「そんな・・・」

「消されないだけでも有り難いと思え」

俺はそのやりとりをカプセルの中で眺めていた。

「なんだこれ？」

俺は頭を抑えながら呟いた。頭痛が激しかった。

「黒装束の男と、親父!？」

訳が分からなかった。三歳から今までの記憶はある。なのにその中

にねじ込まれてきた。

「こんなの、知らねえぞ！」

頭を抑えながら悶える。

『・・・』

継続します。

しばらくたつて、頭痛がおさまる。気が付くと、日が沈みかけていた。

「はあ、はあ、出来損ない？」

頭に真つ先に浮かんだ言葉だった。

「ふざけんな！ やつてやる・・・世界移動・・・俺の力で！」

やり方はわかっていた。たぶん俺がカプセルの中にいるときに、親父が埋め込んだんだろう。

「まずは媒体、OVERSを作る！」

『やめときゃよかつたな。あんどき無駄に意地を張らなかつたら今頃は・・・』後悔しても始まりません。しかし、過去を振り返ることで見える未来もあります。

『ああ、そうだな。続けてくれ』

了解、継続します。

「これでいいはずだ」

息を切らせ、顔に笑みを浮かばせる。辺りはもう暗く、時計は7時をさしていた。母さんは用事でいない。

「よし、やるか！」

意識投射装置を頭に付け、スイッチを入れる。ガクンと体の力が抜ける。意識が深くどこかに潜っていく。

「OVERS Systemは、プレイヤーの介入を感知。ようこ

そ暁 太一。そして、残念なお知らせがあります」

「え？ 残念な知らせ？」

「セプテントリオンに感知されました」

「セプテントリオン・・・（親父がいたとこだ！）で、それがどうマズインだ？」

「セプテントリオンはワールド・ゲート・ジャマーを発動させました。この空間到達まで3秒」

3秒後ぐらいに体に衝撃が走った。

「グフツ！ なんだあ！？」

体を見る。

「！っ！っ！？」

声にならなかつた。体が消えていくのである。

「なんだよこれ！ 俺の体が！！」

「現在、ジャマーの効力で存在データが消去されています」

「このままいくと、俺はどうなるんだ！？」

「無へと帰します。つまり死です」

「マジか！ なんとかなんねえのか！？」「現在、あなたの意識を、第五世界の同一存在のなかに移行する準備をしています」

「何でもいから早くしてくれー！！」

俺の体は、半分以上消えていた。「移行準備完了しました。残りの体のパーツを置いていくことになりますが、よろしいですか？」

「頭だけ残してなんになる！ 置いていく！」

「了解、移行します」

俺が・・・。言葉で表現するならこうだろう。体から魂が抜けていく。

「うわああああ・・・」

再生終了。私のファイルは以上で終わりです。

『思えばあれから始まったんだよな』

おかしなことを言いますね。その言葉は大方進んだときに言う言葉です。私たちの運命は始まったばかりですよ？

『それもそうだな』

END

「改編予定です。しばらくお待ちください」(後書き)

介入者暁の過去が明らかになりました。そして朗報！ネタがない！
頑張ります！

「改編予定です。しばらくお待ちください」(前書き)

この作品のキャラを泣かせるのが好きな作者より：いよいよ夏休みに入り、やったー！と思った矢先、今まで見たことないぐらいの量の宿題が手元にある。・・・この作品の更新が、今までより遅くなりそうな予感・・・。

「改編予定です。しばらくお待ちください」

「おはよー！」

朝の通学路、いつもどおりに理利が来る。そして太一の隣に並んで歩く。

「おはよう、理利さん。」

二人仲良く登校する。その様子を羨ましそうに見つめる一人の少女がいた。

「暁くん、楽しそう・・・」

少女はため息をついた。その目には悲しみの色がある。

「どうした、美雪」

下をむきながら歩く少女に氷室 伸二が話し掛ける。

「え、な、なんでもないよ」

あわてて返事をする北王子 美雪。

「あいつのことか？」

伸二が太一を見ながら言う。

「・・・」

何かを言おうとするが、美雪はそのまま口を閉じた。

「諦めるのはまだ早い。あいつらはまだ、付き合ってる訳ではない」

美雪が驚いて顔を上げる。

「麻理奈から聞いたんだ」

と付け足す伸二。

「あたしの名前を言うときは、お姉さんを付けなさいって言ったでしょ」

後ろを歩いていた麻理奈が伸二に言った。

「いつの間にそこに!？」

伸二は驚いた様子で振り向いた。

「いつの間について、最初からいたわよ」

麻理奈はいつもの、見透かしたかのような笑顔をして言った。

「それよりほら、早くしないと遅刻よ」
三人は走りだした。

「よし、おまえたち。ホーモルムを始めるぞ」
先生はみんなを見回す。

「八神がいないな、まあいいが、今日は補充要員が来たぞ。入れ」
「きゃあ！」

ドアを開けて入っていきなり転んだ。

「今の声は、まさか・・・」

優輝が転んだ少女の顔を覗き込む。

「いたたく。あ、優輝さん、お久しぶりです！」

その少女の顔を見た瞬間、優輝は腰を抜かした。

「う、嘘だろ、嘘だ・・・嘘だー！！」

「おい、関城、静かにしろ」

優輝の様子にみんなが疑問を抱いた。

「優輝、どうしたんだ？」

左近が聞いたが、優輝はこたえず、ただ茫然としていた。

「な、何でおまえがここに！？ あのあと除隊させられたんじゃ・・・」

「あの後ですか？ それが、私もよくわからないうちに、ここに配属になってました」

「よくわからないうちって・・・」

優輝が落胆した様子で呟いた後、先生をキツと睨む。

「先生は俺たちのことを殺す気ですか！？」

「そんなことはない」

「ならなぜこいつをこの部隊に入れたんですか！？」

先生は、まったくといった顔で口を開く。

「関城、何で新しい仲間に、そんなに冷たいんだ？ 仲良くしないとイカンぞ」

「先生はこいつの事、知ってていつてるんですか！？」

先生は何のことかわからなかった。

「まあとにかく、新しい仲間だ。仲良くするように」

「せ、先生……!」

「関城、席に戻れ」

優輝はまだ何か言いたい様子だったが、先生が眉をひそめたため、仕方なく従う優輝。

「やっと静かになったな。それじゃ、自己紹介を」

「はい！ 私は結城 美里といます。よろしくおネガ……!」

美里の頭に金ダライが降ってくる。生徒達は天井と美里を交互に見た。

「お、お願いします!」

『金ダライ？ なんかよくわからんやつが来たな』

放課後。

「まてまてまてまて!」

優輝が、ハンガーに入ろうとしている美里を引き止めた。

「なんですか?」

「そこに入るな!」

「いえ、でも入らないとお仕事が……」

「いいから入るな!」

「どうした優輝、おまえらしくない」

左近が二人の間に割って入る。

「何でそんなに冷たいんだ?」

優輝は一度、頭を抱えたあと口を開いた。

「あー、そうか、おまえはあのことを知らなかったな」

「は?」

「いい機会だし、教えてやるよ。みんなも聞いとけ」

ハンガーに集まり始めていたみんなが立ち止まる。

「こいつは、前にいた部隊で士魂号をダメにしたうえに、そのデー
タも半分近く消しちまったようなやつだぞ」

「それって、土魂号の試運転のために作られた部隊のことでしょ？」
麻理奈が突然口を開く。

「この九州に三つだけあった部隊、その部隊の一つでそんな事故があったって聞いたけど、本当だったのね」

「あねさん、この情報はその部隊の奴らと、軍の上層部と、芝村ぐらいしか知らないようなものですが、どこでそれを？」

驚いた様子の優輝が聞いた。

「フツツ、秘密よ。それと、あなたがその部隊の隊員だったことも知ってるわよ」

麻理奈は、いつものすべてを見透かしたかのような微笑みで言った。

「あねさん、あなたの情報ルートって一体・・・っと、そうじゃなくて！ とにかく、おまえはハンガーに入るな！」

「そ、そんな・・・」

「俺だつて死にたくは・・・」

優輝は、言葉を切った。美里が今にも泣きだしそうになっていた。罪悪感が優輝の心に積もる。

「ごめんなさい・・・私・・・いたら迷惑、ですね」

とつとつ泣きだす美里。優輝に冷たい視線が向けられる。

「・・・わかったよ！ 俺が見張って、そういうことが起こらないようにするから、好きなだけ仕事しろよ」

みんなが、なんだそりゃ！ という顔をしたが、美里は笑顔になっていた。

「あ、ありがとうございます！ よろしくお願いします！」

美里は顔いっぱい笑顔を浮かべていった。優輝は顔を反らせて、おう、とだけ言った。

END

「改編予定です。しばらくお待ちください」(後書き)

次回より、ここにキャラプロフィールを載せます。断固拒絶する場合は僕に直接言ってください。ただちに中断します。

「改編予定です。しばらくお待ちください」(前書き)

一段階進化した作者より：文を、乾様の助言と、国語の教科書と、ハリポタから学び、書きました。まだ中途半端ですので、これからも進化し続けます。応援よろしく願います！

「改編予定です。しばらくお待ちください」

美里が来てから一週間がたった。その間に二度ほど戦闘があつたが、左近が無理をして怪我をした以外はたいした損害（美里がダメにしたスカウト用ライフル7丁、人工筋肉約10キロ、弾薬約25キロを除く）なく勝利した。

士魂号にいたっては、太一の腕と、左近の無茶と、麻理奈率いる整備員達の働きにより稼働状況は最高に保たれていた。

「ちよつとまで！ 何でライフルの整備するのにドライバーが12本もいるんだ？」

ドライバーが大量に入った箱を抱え、ハンガーに入ろうとしている美里を、優輝が止める。

「え？ だって、これだけないと、使っているうちに足りなくなってしまうんです」

頭を抱える優輝。

「そうだったな、お前が使う道具は数十分で使い物にならなくなるんだっただな」

「そうなんですよ、不思議ですよねえ」

美里は明るく言う。

「優輝さん、今日もお手伝いお願いします」

「ああ」

優輝はテキトウに相槌を打つ。

「このままじゃ心配だな。・・・本気で転属しようかな
いたって真剣な顔つきで悩む優輝。

「何か言いました？」

美里が振り返る。箱の底が抜けてドライバーが床に散らばる。

「あ、あー！」

あわてふためく美里。その様子を見て、優輝は転属を決意した。

「はあ、はあ」

グラウンドで、一人手を膝につき肩で息をする太一。

「グラウンド三十周しただけでもう限界か？」

久しい声に太一は振り返った。

「や、八神委員長・・・」

呼吸を整えつつ、顔を上げた太一の前に遼平が立っていた。

「今までどこにいたんですか？ 戦闘にも参加せずに」

遼平は、ここ一週間消息を断っていた。先生ですらその行き先を知らなかったぐらいだ。

「まあ、こちらと色々事情があったんだ。・・・別にサボってたわけじゃない」

太一の表情をみて、一言付け足した。

「それより、麻理奈を知らないか？」

「麻理奈さんですか、ハンガーにいるんじゃないですか？」

太一は汗を拭いながら答えた。

「ああ、それもそうだな。ありがとう」

遼平は軽く片手を上げて去っていった。

「なんだろう、事情って」

『・・・奴らが近い、やな感じだぜ。まったく、これから何が起きようとしてるんだ？』

ハンガー内。何かを見上げる美里と優輝。

「な、なんですか、これ・・・」

先に口を開いたのは美里だった。

「さあ、なんだろう・・・見た感じは士魂号に似てるけど・・・」
優輝が「それ」を見上げたままで言った。「それ」は優輝達のほうを向いた。

「キャッ！」

「うわ！」

美里と優輝が同時に声を上げた。

「う、ううう動いた!？」

驚きのあまりうまく言葉が出ない優輝。美里は言葉を失っていた。

「あら、随分とすごいものがあるじゃない」

二人の後ろから麻理奈が呟く。二人は振り返る。

「あ、あねさん、「これ」が何だかわかるんですか!？」

優輝が麻理奈に聞くと、麻理奈はフツツと笑う。

「これなんていったら傷ついちゃうでしょ。この子って言いなさい」

麻理奈はいつもの見透かした微笑みで言った。

「どういうことですか、あねさん」

優輝は落ち着きを取り戻しつつ聞いた。美里はまた見上げていた。

「この子の名前は土翼号。土魂号の高機動型ね。頭脳にはAIを埋め込んであるから、ある程度の思考をもっているのよ」

麻理奈は土翼号を見上げながら言った。土翼号は麻理奈を見返している。

「さすがだな麻理奈、その通りだ」

遼平がハンガーに入ってきた。麻理奈が腕を組み、振り返る。

「あら、お久しぶりね隊長さん。この子はあなたの?」

「ああ、そうだ」

遼平は腰に手を当てて、土翼号を見上げる。土翼号は遼平を見返す。

「よく手に入ったわね」

麻理奈も土翼号を見上げる。

「なに、ちよつとしたコネさ」

「あら、そしたら随分なコネね。まだ試運転もされてない機体なのに」

「だからさ」

遼平が意地悪く笑った。

「試運転って名目で試作品を持ち出したんだ。結構大変だったぜ」
不敵に、意地悪く笑う遼平。それに反して顔から表情が無くなる

麻理奈。

「そこまでして、あなたがこの子を手に入れた理由はやっぱり・・・

」
突如鳴るサイレンに麻理奈の言葉は遮られた。

「フツ、搬入した日に実戦か・・・ちようどいい」

遼平はさつきとは違う、無邪気な笑顔で言った。その顔を見て、表情が戻る麻理奈。

動きだす美里と優輝。

徐々に集まりはじめる一組の生徒達。口々に驚きの声を上げていく。

少々の笑い声が聞こえながら、準備が進む。おそらく戦闘を多少重ねたため、余裕があったのだろう。

これから、その余裕が、絶望に変わることも知らずに出撃する7821中隊。

END

「改編予定です。しばらくお待ちください」(後書き)

次回、彼らの身に何が!? 『次の話には奴らが一枚噛んでるな・・・』
『介入者暁くん、奴らって誰ですか?』

「改編予定です。しばらくお待ちください」（前書き）

宿題は明日やろうと言いつつ、一週間溜め込んでいる作者より：最近、携帯に逆らわれている。漢字の変換ではいつも変な字が出てくるうえに、前は一発で出た漢字が一発で出なくなったりと、腹が立つ。へし折ってやろうかと何回か思いつつ、布団へ叩きつける程度ですましながら執筆中。

「改編予定です。しばらくお待ちください」

「こちらマークシーうさぎ分隊、かめ分隊応答願う！」

一人のスカウトが建物の影に隠れ、無線機に叫んだ。

「うさぎ分隊は、自分を残し全滅した！ かめ分隊、応答願う！」

しかし、無線からは、ザザーという砂嵐の音しか聞こえてこなかった。

そこから離れた場所には、亀のステッカーが貼られたモコスや土魂しの残骸があちこちに転がっていた。

その脇を通り、7821中隊のトラックが市内に入る。

「今回は相当だな」

左近が呟く。その顔には珍しく緊張の色がある。

「戦車がこつても簡単に破壊されるなんて・・・」

急に左近の表情が変わる。

「どうした、左近？」

優輝が左近に聞く。

「外れてほしい予想が頭に浮かんだ」

そう言った左近の顔は険しかった。

「外れてほしい予想？ どんな予想だ？」

優輝は左近の顔を覗きながら聞いた。

「考えてみる、戦車がこつても簡単にやられるか？」

左近はそう言った後、窓の外にある戦車の残骸を見た。優輝も見
る。

「ゴブリンにはまず無理だ。ナーガならわからんが、あの残骸を見る限りではレーザーで焼かれたようには見えない」

そこまで聞いて、優輝の頭に左近と同じある予想が浮かび、背筋が凍った。

「それってつまり・・・」

優輝の声は消え入りそうな小ささだった。

その声を聞き取ったのか、左近はうなずき、無線を開いた。

「暁十翼長、もしかしたら今回は、ゴルゴーンがいるかもしれませ
ん」

左近の言葉に無線の向こうの太一が驚きの声を上げる。他の生徒も例外ではない。

「それは本当ですか!？」

太一が聞き返してきた。

「自分の予想ですが、おそらく……。でないことを祈りますが、一応警戒を」

左近が、後ろを走るトラックを見ながら言った。そのトラックは、太一の乗った土魂号を乗せたトラックだ。

「ゴルゴーンが……」 太一の頭に、適性試験の時の記憶が甦ってきた。

恐怖が、太一の心を侵略していく。

「太一くん」

無線から理利の声が聞こえてくる。

「心配しないで。最初の頃より強くなってるわけだし、それに今度は一人じゃない、仲間がいるでしょ」

理利の言葉に太一の不安は和らいだ。

「それに、あなたがすっかりしなかったら、みんなが不安になっちゃうでしょ。あなたしかゴルゴーンを倒せないわけだし」

「そうだね。僕がすっかりしなかったら、ダメだよ」

太一の顔には、笑みがあつた。

「おまえら、俺のこと忘れてないか？」

無線から遼平の声が聞こえてきた。

「あ、忘れてた……」

理利が小さく言ったが、無線はその一言を拾っていた。

「率直な答えをありがとう」

遼平はいじけた様子で言った。

「まあいいか。とりあえず戦闘準備だ」

遼平がそういうと、トラックから土翼号が降りた。

それに続いて土魂号も降りる。

「臨時ハンガー、展開完了よ」

麻理奈が報告する。

「わかった。よし、それじゃあ行くとするか、暁十翼長」

土翼号が手で合図する。

「あ・・・隊長さん、聞いてちょうだい」

麻理奈が遼平を止めた。

「どうした？」

「この戦場に、ハイドローズがいるわ」

その一言に遼平は反応した。

「なに！？ 本当か！？」

「あたしがこんな時に嘘つくと思う？」

遼平は突然、走りだした。

「暁十翼長、後は頼んだ！」

そう言い残し、ジャンプする。いくつかの建物の上を軽々と飛び越し、あっという間に見えなくなる。

「す、すごい・・・」

太一が呟く。

そこにいたみんなが啞然としていた。

「おまえら、ボーツとすんな！」

左近が叫んだ。

「戦闘はもう始まってんだぞ！」

「そうですね」

太一はモニターを確認した。物凄い速さで土翼号が移動している。どうやら臯達を見つけたようだ。

太一は目を戻し、自分達のまわりを確認する。ゴブリンが数匹こちらに向かっていている。

「ゴブリンが数匹、左側からこちらに向かっていきます」

スカウト達が銃を構える。

「俺にとっては、最後の戦闘か」

優輝が呟いた後、ゴブリンが建物の隙間から飛び出してくる。瞬く間に幻へと還ってゆくゴブリン。

「これから町のなかに移動します」

太一は移動を開始した。

「気をつけてね」

理利が小さく、まわりに聞こえないくらいに呟く。

おまけ

「あなたは行かないの？」

一人残った優輝に、麻理奈が聞いた。

「ああ、心配だからね」

優輝が答えた。

「あら、美里ちゃんが？」

「ち、ちが・・・いや、それもあるけど」

優輝が顔を赤くして言う。

「ほら、ハンガーが襲われたら大変だし、そうになったら涼子さん人じゃ厳しいだろうし」

色々と言いつくす優輝。

「結局は、美里ちゃんが心配なんですよ」

麻理奈が、微笑みながら核心をつく。

「そうなんですよ？ そうでしょ？ そうって言いなさい」

詰め寄る麻理奈。

「い、いや、その・・・はい」

観念したかのように小さくうなづく優輝。その様子を見た麻理奈がフツツと笑う。

「だって、美里ちゃん」

ハツとして振り返る優輝。そこには美里がいた。

「本当ですか、優輝さん！」

顔には満点の喜びの色。

「な、あ・・・」 もはや優輝には逃げ場はなかった。

「そ、そうだ、当たり前だろ。おまえ一人残したら、何しでかすかわからんねえからな」

言っけて恥ずかしくなる優輝。だが、内心では、まあいいか、と思っていた。

「改編予定です。しばらくお待ちください」（後書き）

すみません。前回載せる予定だったキャラプロフィールでしたが、寝ぼけて違うことを書いてしまいました。謝罪します。載せませす、プロフィール。・・・あかつき 暁 太一たいち、16歳、男、パイロット、徴兵により学兵となった少年。幼い頃から兵器に興味があり、銃火器についての知識は誰よりも高い。基本的に争いを好まず、徴兵されたときも落ち込んでいたが、最近は戦い慣れてきた感じである。押しに弱く、頼みごとはほとんど断れない。

「改編予定です。しばらくお待ちください」(前書き)

デビレンジャーが意外と受けて少し驚いている作者より：更新遅れてすみません。決してこの作品に飽きたわけではありません。ですから、これからもご愛読お願いいたします。

「改編予定です。しばらくお待ちください」

「左方向にゴブリン27匹、リーダー7匹、右方向にゴブリン6匹、ナーガが1匹、前方はナーガが4匹・・・」

太一は、モニターに映った現実を正確に読み上げる。

「おいおい、今日は随分と多いな」

左近が少し余裕混じりで言った。太一が言ったなかにゴルゴーンの名前がなかったからだろう。

「暁十翼長、今は八神百翼長がいないから、俺が指揮官を努めようと思うが、異論は？」

「ありません。お願いします、左近さん」

太一がそう言うと、左近は頷いて、無線を全員に開いた。

「これから、不在の八神百翼長に代わって自分が指揮をとるが、藤井千翼長、許可をお願いします」

「いいわよ、許可します」

他の生徒達も賛成した。

「よし、そしたらスカウト隊は二つに分ける。まずは二人を残して左方向のゴブリンを攻撃する。

残りの二人は俺と一緒に右方向に行くぞ。

暁十翼長は前方を頼みます」

見事な采配ぶりだった。

左近は指揮官にむいている。だれもがそう思ったに違いない。

「行くぞ！」

「了解！」

全員が指示通り動きだす。

「この20メートル先の角を右に曲がったら、すぐ5メートル前にナーガが2匹、さらに7先の角を左に曲がると1匹、よし！」

太一は角まで走ると、建物に張りついた。

このすぐ向こうにはナーガがいる。深呼吸をし、再びモニターを確認する。

ナーガはまだ気付いていないようだ。

「よし、行くぞ！」

太一は角から飛び出し、引き金を引く。

ナーガはほとんど抵抗できずに消えていった。

最後の一匹が角を曲がってきた。

「うわっ！ ちょっと！」

太一はその時、ライフルのマガジンを交換していた。ナーガの額から光の筋がのびる。

太一は、体をひねり間一髪かわすと、ナーガに向かって飛んだ。

「食らえ！」

ナーガに対して蹴を入れる。

ゴキゴキツという骨が砕ける音とともに吹き飛ぶナーガ。

「よし！」

消えていくナーガを見下ろしながら太一はガッツポーズをした。

「そうだ、他のみんなは大丈夫かな？」

太一は左のモニターに目を移す。

「みんなも倒せたみたい。よかった」

モニターには敵のマークはなかった。

「戦闘終了かな？」

太一が引き上げようとしたその時、モニターに一つ、いや、二つ、マークが現われた。

「敵の増援？」

太一はマークについている名前を確認した。

「な・・・ゴルゴーン!？」

太一はすぐさま無線を開いた。

「皆さん、ゴルゴーンが出ました！ それも二匹！」

ほぼ全員から驚きの声上がる。

「暁十翼長、ゴルゴーン的位置は？」

左近は落ち着き払っていった。

やはり指揮官としての素質があるようだ。

「まず一匹は西側の、ハイドローズの近くです。もう一匹は・・・ハンガーの後方30メートル!？」

太一は急いで引き返した。「理利さん!」

「うん、わかってる!」

無線の向こうの理利は落ち着いていた。

「ゴルゴーンはまだ建物の影だから避難できる」

それを聞いて安心する太一。

ほっ、と胸をなでおろす。

臨時ハンガー前は騒がしかった。

撤退準備を整えるもの。(ほとんど)

戦うといつてきかないもの。(涼子一人)

大切な人のためにできるだけのことをするもの。(伸二)
新品の部品を壊されないように、つきっきりで手伝うもの。(優輝)

それぞれがせわしく動き回る。

「理利ちゃん、ちよつと手伝ってちょうだい」

由美子が重症患者を担架に乗せながら言った。

「あ、はい、何を手伝えればいいですか?」

理利は、トラックに弾薬箱を積み込みながら返事をした。

「その患者を担架に乗せてほしいの」

由美子が指を差す。

「あ、はい、わかりました」

理利は患者に駆け寄る。

「大丈夫ですか?」

理利が患者に話し掛ける。

「ええ、大丈夫です。すみません、お手数をおかけして」

その患者は笑っていった。痛みでわずかに歪んだ笑顔だった。

彼の名は岡田^{おかだ} 和也^{かずや}。

「いえ、そんなことはありません。動かないでくださいね」
理利が抱き上げる。ウツと軽く悲鳴を上げる和也。

「そうだ、マークシー部隊がどうなったか、知りませんか？」

担架に乗せられ、運ばれようとした時に、和也が理利に聞いた。

「マークシー部隊ですか？ すみません、分かりません」

理利が申し訳なさそうに言った。

「いえ、分からないのなら仕方がない」

和也は笑った。淋しそうに。

そして、そのまま運ばれていった。

「改編予定です。しばらくお待ちください」（後書き）

風さん、すみません。和也は、今はこういった形で登場しましたが、
いずれはクラスに加えます。（二組になるかも知れませんが）では、
キャラプロフィール・井巻 理利、16歳、女、整備員、太一と同
じく、徴兵によってこの7821部隊に配属された。父親が機械関
係の仕事をしていて、その手伝いをしていたため機械整備はなかな
かのもの。太一に恋心を抱く。

「改編予定です。しばらくお待ちください」（前書き）

エボニーとアイボリーを腰に下げて出かけてみたい作者より…あー、青の章欲しいー。ツタヤに売ってないー。なんてこった……。もうヤダ！なぜ売ってない！オカシイダロ！はあ、はあ。それより今作ですが、作者としても早くおわらせて次の章に行きたいです。と言うか次回で前日おわらせます。

「改編予定です。しばらくお待ちください」

撤退準備が着々と完了していく。
もう大方の作業は終了していた。

「いよっし、あと少し!」

優輝が弾薬箱をトラックに搭せながら言った。

「あとは患者だけか」

伸二は、忙しそうに駆け回る美雪を見ながら言った。

「そうだな。あとは俺一人でも大丈夫だから、行ってやれよ」

優輝は美雪を親指で指しながら言う。

「ああ、恩にきる」

そういつて美雪のもとに駆け寄る伸二。

「あらあら、ずいぶんと男前なことするじゃない。お母さん、うれ
しいわ」

「あなたのような人がお母さんだった記憶がないんですけど。何の
ようですかあねさん？」

後ろから声をかけてきた麻理奈に、優輝は適当な答えで返事をし
た。

「あら、あなたがちゃんとやってるか見に来たのよ」
相変わらずの見透かした微笑みで答える麻理奈。

「あねさんに心配されるなんて、世も終わりですね」

「あら、ずいぶんな言い方ね。お姉さん泣いちゃうわよ」

そういつて麻理奈は泣き真似をした。あまりにもわざとらしく。

「あねさん、それでも千翼長ですか？」

優輝は弾薬の仕分けに戻る。

「それより、美里ちゃんはどうしたの？」

麻理奈はまわりを見回しながら言った。

「美里ならそこに……」

いたはずの場所を見る。そこには誰もいない。

「あの馬鹿!!」

優輝はあてもなく走りだす。

「あの子も大変ねえ」

言うこととは裏腹にいつもの微笑みをつかべる麻理奈。

「撤収準備完了しました!」

奏恵が敬礼しながら麻理奈に言った。

彼女は指揮車が無くなったため、輸送トラックの運転手に転属したのだった。

「そう。みんなちゃんと乗ってる?」

「はい、確認済みです」

麻理奈が聞くと、敬礼の格好のまま奏恵が答える。

「それじゃあ、ゴルゴーンが現われる前に出発しましょう」

麻理奈は移送トラックに乗りながら指示する。

「了解、発進しま……」

奏恵の言葉はそこで途切れた。

全員が気になって奏恵のほうをむく。胸騒ぎがする。

奏恵は口をぽっかりと開け、前方を指差して固まっていた。

その方向には、発進しようとしている整備トラックがあり、その前には大きさらメートルくらいの黒い塊があった。

よく見ると、その塊のあちこちには赤い目がついており、四本の足で地面に立ち、サソリの尻尾のようなものが整備トラックを睨み付けている。

「あれは、キメラ!」

麻理奈が驚きの表情で言った。

さっきまでそこには何もいなかったはずなのに、突然の敵襲。全員の動きが一時的に停止する。

「! マズイ! あのトラックには美里と優輝が……!」

伸二がそう言いかけたときだった。

キメラの尾が光り、筋がのびる。その筋は整備トラックを貫いた。
爆発音。

「優輝さん！ 美里さん！」

涼子が愛用の日本刀を握り締め、トラックから飛び降りる。

「くっ！」

伸二もトラックから降りる。

「コロシテクレ……」

後ろから聞き慣れない声が聞こえた。きみの悪い擦れた声だった。伸二はビクツとして振り返る。その目に映ったのは人の頭だった。

「……悪趣味なやつめ！」

伸二はその頭めがけ腰に下げた刀をふる。

キシヤアア！ と奇声を上げ、飛頭蛮が真つ二つになり消えていく。

「涼子さん！ 優輝たちを頼みます！」

伸二が、キメラにむかって走っていく涼子に叫んだ。涼子は返事の代わりに片手をあげた。

「っ！ クソ！」

美里は目を覚ましたときにその一言を聞いた。まだ意識ははっきりせず、もつろうとしていた。

「優輝……さん、大丈夫ですか？」

ぼやける視界に優輝をとらえながら美里は尋ねた。

「美里！ 無事か！？」

優輝は質問には答えなかった。美里は優輝の顔を見ようと目を細める。

突然顔に水滴が落ちてきた。美里は最初、優輝が泣いているのかと思ったが、涙にしてはとろりとしていてなかなか頬を滑っていかなかった。

しだいに落ちてくる量が増えてくる。

「キメラか……」

優輝はそう呟くと美里のうえに力なく倒れこんできた。

「優輝さん？」

やっと自由に動かせるようになった体を起こし、辺りを見回す。

トラックから投げ出され、路上にいた。

トラックは、操縦席の辺りが根こそぎ無くなっていた。積み荷は散乱し、トラックは引っ繰り返っていた。

そして、自分に倒れこんでいる優輝を見る。美里の目に映ったのは赤と白だけだった。

「優輝……さん」

美里の声は震えていた。

「優輝さん、優輝さん！」

優輝の体を揺すが、反応はない。ただ力なくゆれているだけだ。

「どうした美里！」

左近が戻ってきた。

「左近さん、優輝さんが……」

美里が目には涙を浮かべて左近のほうをむく。

左近は、美里の腕に抱かれた優輝を見た。

「優輝……」

その見た背中は鮮やかに染められていた。

「待ってる、すぐにお知らせる」

左近はキメラに銃口を向ける。

キメラは涼子に切り付けられて後退していた。

「涼子！ 離れてる！」

その声と同時に引き金を引く。

その弾がキメラに命中してから涼子は後ろに飛んだ。

次々と引き金を引く。キメラは当たる度に体を揺らす。しかし、致命傷にはならなかった。

左近が弾を切らして舌打ちした時、ジャイアントアサルトの連射音が鳴り響いた。

「暁十翼長！」

左近が振り返る。そこには土魂号がいた。

キメラはジャイアントアサルトの連射を受け、消えていった。

「大丈夫ですか？」

太一が左近たちを見る。そして、赤と白に染まった優輝を見つけた。

「優輝さん……」

太一の思考機能が停止した。

左近が優輝を手に抱える。

「大丈夫か？」

その口調はやさしかった。優輝は目をわずかに開けた。

「大丈夫に見えたらおまえの目はどうかしてるぜ」

力なく笑う優輝。おそらく今の優輝は、何をしようとも力なく見えるだろう。

「俺、死ぬかな？」

「……純に、よろしくな」

優輝は親指を立てる。そのまま眠りにつく。

「……どうしてだ？ なぜ俺の親友はこうも簡単に、死んでいくんだ？」

皆、答えることはできない。

皆、下をむくことしかできない。

皆、悲しむことしかできない。

『皆、ただ受け入れるしかない。それが運命……。その運命を受け入れたくないのなら、逃げればいい。それができないから戦い続ける』

その場には静寂しかない。誰も、近づいてくる絶望に気付かずに。

「改編予定です。しばらくお待ちください」（後書き）

あーまた死んじゃった……書いてて悲しいよ。でもキャラプロフィール……八神 遼平、16才、指揮者、彼は志願してこの部隊にやってきた。軍内部にいろいろと根回しがきくなぞの人物。さらに福岡県内でも指折り数えるしかない不良の一人。矢上と何らかの関係があるとかないとか。……前と書き方違うような……ま、いつか。

「改編予定です。しばらくお待ちください」

「そんな……優輝さんが……」

太一はなんとも言えない、悲しみのような、怒りのような、自虐のような感情に胸を締め付けられる。涙が溢れ出てくる。優輝と過ごした日々が思い出される。

記憶の中の優輝は笑っていた。いつも。

「は、はは……また、守れなかった。ハハハハ、ハツハハ！」

太一が突如笑いだす。心の重圧に耐えられなかった。タガが外れると、不思議と笑いが込み上げる。

「太一くん！ しっかりして！ 気を確かに持って！」

理利が無線で太一に呼び掛ける。しかし太一は、狂ったように笑い続けた。

「太一！ クソツ、俺の声は届かねえのか！ 誰か気付け！ 敵が迫ってる、ゴルゴーンだ！」

介入者暁は叫ぶ。だがその声は太一には届かない。他の誰にも。

介入者暁は己の非力を、ゴルゴーンの生体ミサイルによって横転する輸送トラックをただ眺めながら呪った。

「きやあああ！」

同時にあがった数々の声の中から、太一は理利の悲鳴を聞き分けた。

土魂号が走りだす。ゴルゴーンにむかって、全速で。

土魂号はゴルゴーンを蹴り倒した。さらにその上に馬乗りになり何度も殴り付ける。ゴルゴーンは消えるまで殴られ続けた。

土魂号はゆっくりと立ち上がった。その両手はぐしゃぐしゃで原型を留めてはいなかった。

横転したトラックから次々とみんなが這い出してくる。奏恵が間一髪で直撃を回避したのだった。おかげで、負傷者はだが死者はいなかった。

「た、太一くん……」

理利は無線を開いて太一に呼び掛けた。しかし、太一は反応しなかった。

土魂号はトラックを起こす作業に取り掛かった。手がボロボロなのでうまくはいかなかった。

左近は優輝の亡骸を強く抱いていた。そのうち立ち上がり、優輝を腕に抱え、ガンパレードマーチを小さく口ずさみながら土魂号に起こされたトラックに乗った。

美里は表情を消していた。ふらふらとトラックにむかう。

土魂号も運搬用トラックに乗り込む。

「全員無事か？」

遼平が戻ってきた。土翼号はほぼ無傷だった。

「そうね。優輝くん以外は生きているわ」

麻理奈が控えめに言った。

「優輝が……？」

遼平は左近が抱えている優輝を見た。

「……」

遼平はそれ以上何も言わなかった。

「太一くん……」

土魂号パイロットは無言だった。どれだけ無線で呼び掛けても返事はまったく返ってこない。理利はトラックに、半ば引きずられながら乗り込んだ。

それぞれが悲しみを抱き、引き上げる。太陽は沈みかけている。

ある建物のなか。人の死体の山を眺めながら口元を釣り上げている人物がいた。

「報告します。建物内部に潜んでいた共生派十七名のうち、二名を取り逃がしてしまいました」

歩兵小隊の隊長が男に敬礼をしながら言った。

「そうか。ならば必ず捜し出し排除しろ」

男はそう言った。小隊長は敬礼をしなおすと走っていった。

「やつらは近いうちに動きを見せるな。そう思わんか檜山」

檜山と呼ばれたものは少しの間考えたあと口を開いた。

「おそらく動くでしょう。私的には福岡あたりに逃げ込んだと思います」

「なぜそう思う？」

男は興味深そうに檜山のほうをむいた。

「やつらは、水俣から福岡方面に移動してありましたから」

檜山は死体の山を見下しながら言った。隣に立っている男は笑った。

「そなたの言うことを信じよう。檜山、福岡に向かえ」

「は！」

檜山は敬礼をした。

「フッフ。奴らがどう出るか楽しみだな」

男は窓の外を見た。日が沈んでいく。

「奴らはもう福岡に到着している。さっそくひと暴れしてくれた」

男が見ていた窓から人が入ってきた。檜山は男をかばうように身構えた。

「俺だ、カマヤだ。久しいな隆治^{しゅうじ}。どうだ、芝村は？」

カマヤと名乗る男は窓枠に腰掛けた。

「なかなかいい。俺の目標を達成する分にはな」

隆治は答えた。檜山は構えをといた。

「そうか、よかったな」

カマヤはナイフを取り出し、手のひらでくると回している。

「こっちは最悪だ。かわいい教え子が二人も死んだ」

カマヤはナイフをしまった。隆治に悲しみを帯びた笑顔を見せた。

「そうか。俺には関係ないがな。一つ頼みを聞いてくれ」

カマヤはどうぞ、といった感じで肩をあげた。

「こいつをおまえのこの生徒として置いてくれ」

隆治は檜山の肩に手を乗せていった。カマヤはにっこりと笑ってうなずいた。

「それじゃあ明日にでも来てくれ」

カマヤはそう言い残し窓から飛び降りる。ちなみにここは三階だ。

「檜山」

「わかりました」

檜山は駆け出した。

「さて。戻るか」

隆治は建物を出た。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7191a/>

ガンパレードマーチ ~福岡県守備部隊7821中隊~

2010年10月17日03時57分発行